カーネギー曰く『我が製鋼所成功の秘訣は他なし、成るべく勞働者をして利益の分配に與からしめたるにあり、勞働者をして漸々株主たらしめたるにあり、既に然る後勞働者は單に一の雇人たるに止まらず自個の製鋼所自個の事業として誠實に勤勉して倦むとなし、成功せざらんとするも得ざりしのみ』、と世の資本主深く察すべき也

He only is a well-made man who has a good determination. Emerson.

Who through long days of labor,
And nights devoid of ease,
Still heard in his soul the music of wonderful melodies.

Longfellow.

覇國敗亡國興

倉辻白蛇（ベッチェロル、オウロース）先生

覇國が亡國か、運命の神は此難題を我等日本國民の頭上に浴せつゝ、冷かに我等が二者其孰れを取らんとするかを監視せるに似たり

請ふ亡國の一語を以て不祥なりと速斷する勿れ、古來覇國の氣運を孕みたる國家には、必ず亦亡國の危機をも含むを免れざりさ、即ち覇國なるの大事に志す程のものは亦亡國たるの危險を侵しつゝあるを自覺せざるべからず、運命は凡て極端より極端に走るを原則とす、故に此意味に於ける亡國の語は、先づ之れを覇國の語と對照すべく不祥の語として一概に排斥し去るべき者にあらざるなり

吾人は現時の時局に對し、多く樂觀し多く悲觀するを欲せず、然れども靜かに時局の現在と將來とを通觀せば、運命は正に覇國か亡國かの取一條件（オルタネーブ）を提供し、二者必ず

其一を取らんとを遊說しつゝあるを認めざる能はず、見るべし、新に沙河に於て博したる我戰勝は露兵の到底我が敵手に非るを證明して餘蘊なきも、戰略に屈して倘政略に伸んとする露國は、今や全國の兵を擧げて之れを極東に集め死力を盡して我れと雌雄を決すべしと聲言するに非ずや、忠勇にして精鍊なる我兵勇が、克く此大敵と對抗して一步を讓るなきは勿論、遂には彼れの大兵をして殲滅爲すなきに至らしむることを期して待つべしと雖も、之れに依て戰局の長期に亘るは到底免るべからざる數となれり、過日官民衆庶に賜ひたる聖勅は、明かに戰局前途の遼遠なるを指示し、以て國民の持久耐忍を要求し賜へり、五十萬の同胞、國民、誰れか此聖勅を仰いで奮起聖意に協はんことを期せざるものあらん、戰局の長期に亘ること既に此の如く明瞭なりとせば、持久耐忍は、素と國民の分にして、假令戰局幾十百年に及ぶも、終局の勝を制する迄は意寸毫も屈せざるべく、又其屈するあるを許さゞる也

而も聖勅は吾人に持久耐忍を要求し賜ふと同時に、又當然一大決心をも要求し賜ふと見よ、戰局の收拾得て其期を知るべからざるに當り、國民の覺悟は正に耐へ得べき負

擔以上を負擔するの決心なかるべからざるに非ずや曾て大隈氏は、戰局を以て約二ケ年と假定し暗に國民の負擔は之れに依て略其極點に達すべきを諷したり、大隈氏が戰局を二ケ年と豫定したること、果して如何なる根據に出でしやを知らずと雖も、二ケ年を以て負擔の極度と豫定したる同氏の意見は、歐米人をして日本に二年以上の負擔力なきを誤信せしめ、延て海外の我公債に少からざる影響を及ぼしたり、吾人は今こゝに大隈氏の說に向て其是非當否を問はんとするものに非ず、唯だ戰局を殊更らに二年と限るは謂はれなきことにして、日露の其國を賭けて勝敗を決するには、少くとも十年二十年を期せざるべからざるを信ずるのみ、既に十年二十年を期せざるべからずと假りに二年を極度とせる國民の負擔力は、正に極度以上幾十倍の負擔を課せらるゝの覺悟なかるべからず、吾人が今殊更らに覇國か亡國かの警語を發するは、即ち大勢の此の如く危急重要なるものあるによれり

勿論吾人は、戰費の負擔力に於て、日本は決して露國の下位にあるを認めず、寧ろ遙かに其上位にあるべきを信ずと雖も、等しく限りなき戰局に對しては、兩國共に一

大危險の地位にあるを認めざる能はず、況んや露は侵略膨脹の爲めに戰へるに反し、我れは專ら自衞の爲めに戰ひつゝあり、是れ動もすれば環視の列國をして、日本を以て多く露國よりも危險の地位にありとなさしむる所以、又我公債の、連戰連勝に關せずして多く變動弱氣を示せる所以也

兵の强弱は既に既決の問題となれり、此上は廣き意味に於ける國力の强弱問題とならざるべからず、こゝに於て兵に弱き露國も、其國力の要素たる領土と人口とに於ては其量遙かに我れに優るものある以上、露國は決して侮るべからざる大敵なり、我國は最早、國家の全部を賭して爭はざるべからず、是れ免れんと欲するも免る能はざる運命なり

由來我國民の戰局を見ること餘りに輕きに失したり、旅順口に於ける大捷の報一度び天外より飛び來てより、國民擧て戰爭を見ること家常茶飯の如く、一人として勝利の我れにあるを信ぜざるものなし、而も今や漸く局面は轉ぜり、爭は獨り戰鬪員の强弱に止まらずして廣く國民全體の爭となれり、此爭にして若し我れの勝に歸せん乎、

日本は獨り東洋の覇國たるのみならず、又實に世界の覇國たるを得べし、然るに覇者し意の如くならず、かの銳敏を以て自任せる獨帝の信ずるが如く、露國遂に日本に勝つの期ありとせば、是れ日本をして直ちに亡國の悲境に陷らしむるもの也、戰は最早清韓の安否よりも寧ろ日本の安危に繫れり、過日の聖勅、豈此危急に對する全國民の自覺を喚起するものに非ずして何ぞや

古來、覇を天下に稱するもの、何れが一度亡國の非運に接せざるものあらん、亡國の危機は即ち覇國の前提にして、覇者の月桂冠は此危險より生じたる產物なり、昔者英雄那翁勃勃の才を抱いて未だ志を得ず、轗軻落魄失意の頂點にありしとき、常に高唱して云ふ我れは帝王ならずんば則ち乞食たるべきのみと、而して九地の底に沈みたる彼れは、遂に九天に昇て王中の王となれり、こゝに世界の一大國を敵として國家の運命を賭しつゝある東邦の英雄國民、焉んぞ覇國か亡國かの大決心を以て奮進し、然る後覇者の月桂冠を頂かずして止むべけんや

Nature is a revelation of God; Art a revelation of man.

Longfellow.

松居松葉先生……演劇放談

松居松葉先生
演劇放談

◎私に何か話せ？困りましたな、私の口はあらゆるものを不消化的に喰ふためと、あらゆる思想をノンセンスに吐く爲めにのみ用ひられるので、四角張つて左樣然らばと來た日には、殆んど用を爲さないのです、併し外ならん華山君の御依頼である、演劇についてちよつぴり御話を致しませう

◎日本の今の芝居を、青年に見せる事が好いか悪いかと云ふ問題は、もう既に形式的な問題となつて了ひました、事實に於ては、今まで藝妓や待合の女將さんを、最上の顧客として居る芝居は、次第に青年の占有物になりさうになつて來ました。此間私は壯士俳優の爲めに、ダンテの『神曲』の中に、ちよいと顔を出して居る『フランチエスカ』を脚本に仕立てゝ、本郷座で興行させました、すると初りから見物の多數は學

生であつたのです、而して其學生は如何いふ風に此芝居を見て居たかと云ふと、實に〳〵熱心なもので、さながら名士碩學の大演說でも聞いてる樣な靜肅を以て、端役が饒舌つてるたつた、一語でも聞洩すまいと力めて居る甚だしい、篤志家になると殆んど毎晩つゞけて見に行つたと云ひます

◎これが松居松葉といふヘッポコ作者の書いたもので、極めて蕪雜な、極めて拙劣なものでも尙此の如しです、若し是が今の名家、大家、大詩人、大小說家、大批評家さまがたの御書きになつたものであつたならば、此青年殊に其多數を占めて居る學生諸子の上に與ふる印象は、實に大したものであらうと思ひます、私は此現象を見た時にわれ知らず戰慄をしました

◎藝術に對して實感を起すなどゝいふ事は、實に馬鹿げた事で、藝術家の目から見たら、誠に度し難い人間といふのでございませう、併し今の芝居といふものは、藝術の異味の分る人のみが、高尙なる娛樂を得べく出かける場合では無いのです、本郷座なぞで極めて多かつた青年諸子の中には、藝術を味ふ高い趣味をもつてる方々も相應

にはございませうが、其多數は源氏節へ行かうか、本郷座にしやうかといふ位の程度で、戯曲（ドラマ）といふ高尚一點張でやつて出かけたものゝみとは考へられません、勿論これは私の樣な下等な作劇家（プレーライター）と云ふのさへ僭越ですが）書いた劇曲が登場する場合には、是程の事もございますまい、直覺的に藝術の妙義を捕へ得る人、審美學の學說を馬の脚にまであて嵌め得る人、まあ如斯いふ連中は髯を掀つて御出かけになる事でせうが、其場合でも私どもの樣な分らずやゝ、矢張源氏節の代りに見に來やうといふ連中が、一人も立交らねといふ譯には行かぬ、由慢になる話ではないから、單に一例として引くだけだが、此間の『アランチュエカ』を見て、非常に同情の念をもやされ、こんな芝居なら何度でも見る、誰も來い、彼も來いと、度々多數の相手をこしらへては、見物に出かけたといふ新橋の藝妓屋の女將さんが有る、こんなのは學者先生がなの目から見れば、相手にするには足らぬ代物に相違ないが、見物の中には如斯いふのも少くは無い、いや仔細に洵げて見たならば、或ひは青年の見物の

中にも、普通の見物の中にも、如斯いふ實感から趣味を感じて見物に來る客が、割合に多いかも知らぬ、いや在外其方が多數であらう

◎さあ如斯なると、學者先生がたが、勢力の無い文藝新聞や、小さな文藝雜誌などの上から、實感で藝術に對されてたまるものかなどゝ御威張になつても、一向利目が無い、利目の無い間は、此實感の御客が絶えぬものと覺悟せねばならぬ、ソコで狂言を書くものも、芝居をするものも、これらの人に對して何を爲べきかと云ふ事を能く心得ねばならぬ

◎自由平等といふ事は、人間の自然法である、國民は何時でも參政權をもたねばならぬ、さあ如此明かなる本義が分つて居るからは、臺灣の生蕃の仲間へても、それを許してやつたら好さうなものだが、許してやつても彼等は、其爲めに却つて自由も平等も得られなくなる、と、云ふ樣な道理で、芝居を見て實感を起す奴などは眼中に置く必要は無い、藝術の本義は如斯であるから、左樣せねばならぬ、との御議論が實行された日には、眼中に置かれぬ連中の中に、どの位怪我人が出る歟も知れぬ、經世

松居松葉先生……演劇放談

の事を以て其身の任とする者は、此う云ふ事にも大なる注意を拂はねばならぬ

◎私の様なもの丶書いたものでさへ、片唾をのんで居て呉れる連中、此人たちは實は、乾度二組や三組の怪しい道行が出來るさうてす、いやさうてすては無い、私は自分の書く芝居が、如何いふ風に社會に影響を及ぼすかを研究する爲めには、隨分くだらない、詮索をも致しましたが、其際種々の發行物が意外なる惡感化を、多數の少年少女……のみでは無い、然るべき人たちにも與へて居る事を發見し得ました、芝居に於てへ、御多分に洩れぬ事は全くの事實て、立廻りのあとには見物の眉昂り肩たかまり、淫猥な幕のあとには、見物同士が見かはして交換する微笑に、一種のいやあな氣の拔けた樣な、變なところが見えまする

◎こんな怖ろしい見物を前に控へて、藝術超道德論などをとなへましたならば、其結果は如何なるてございませう、私は今の學者の方々が、芝居の事を御心配下されまして、いろ〳〵と御敎授下さる事を深く感謝致しますが、併し時々あまり仙人的の御

敎訓を頂戴すると、私共の樣に凡人離れのしないものは、御挨拶にも閉口する樣な次第と相成ります上田文學士が先頃『歌舞伎』といふ雜誌で、私の『ヲランチェスカ』をば親切に御許をなすつて下すつた中に、『作者は、何故に二人の間に眞の愛を交はさしめなかつたのであらう、これには種々都合もある事であらうが、單に姦夫姦婦の劇は、風敎に害ある位の論……いや誠に簡單な御話で、恐入るの外は有りません、前申上る樣な心地がしました。姦夫姦婦の劇は風敎に害を拜見した時に、思はず身體が痲痺る樣な心地がしました。姦夫姦婦の劇を見せるのは、どれ程の利益があるのてございませう。『個人を沒却し社會の爲めに盲動し、精神全く萎靡したものは、人類の進步は違つたものてある』と、上田學士は大變にヨガつて居らせられますが、成程團體の爲めに盲動するのは愚てある、精神を萎靡させるまで社會の爲めに働くとつまらぬか知らぬが、團體の爲めに竭すもの必らずしも個人性を沒却するにも當らねば、活眼を開いても働ける、精神も活潑にやつて行けぬ事なきは、猶ほ上田先生が世間の大きな了見の人間から見れば、

松居松葉先生……演劇放談

村學究の腰行厨のと罵らるべき學校教師をなすつて、社會團體の爲めに働かれて居られても、ソレが腰拔け腐拔けの所業でもなければ、精神が萎靡してやつて居られるのでもないと云ふのと同じてあらうと思ひます

◎成程藝術は大切なものでせう、併し人間なくして藝術のある例もなければ、社會を外にして最高の理想の存在する場處もございません。ソコて若し藝術の爲めに、社會が紊亂し、人類が損傷されるといふ事になれば、人間は藝術の存在を拒否せねばならぬ義務があると思ひます。餘り神經質な、偏狹な議論の樣ではございますが、今の怪しい見物に向つて、猛烈な熱情などを振廻されては堪つたものではございません、若し又何でも左樣いふ芝居を見たいと思召すなら、私は左樣いふ先生がたに御願ひ申します、ちと奥樣がたに姦通をおさせになつては如何てすと、そして其先生がたが、自分の奥樣が單に良妻賢母位の理想に滿足なさらず、ちよい〳〵情夫を拵へては奇道に赴くのを御覽になり、いや女房でかした感服々々と額をたゝいて御出でになるさまを拜見しても、それを芝居に仕組んて見たいと存じます

◎學校から直ぐに山の手邊の、片田舍へ世帶をもつて、世間知らずて一生を送る人々の中には、下町に通用のしない無法な事をいふ人が多いので、實に御話が仕憎くつていけません、此間も私の居ります新聞て、或藥物の話を書かうと思つて、某醫學博士に田ウコギが有害無益の草であるといふ説明をしてもらひたい、あなた方がそれを明かにして下さると、多數の迷信者を救つてやる事が出來ますると、頻りに賴みましたれど、此博士殿は傲然として僕などに、そんな暇があるものか、そんな草を信用する様な人間は、死んでしまつた處て自業自得だ、うつちやつて置くが好いと、如何しても我社の望みを容れてくれませんでした、私は醫學博士――人間の生命を救ふべき筈の學者どのが、こんな不人情な事をいふとは實に怪しからんと思ひましたから、紙面でコツピどく攻撃しやうと決心致しましたところ、其後其博士どの自分でも非を悟りましたかして、人を以て此間の話をするから社員に逢つて呉れと申込んでまゐりましたつけ。今の學者先生がたの多數は、まあ如此云つた工合に社會に對して責任を負ふ事を知らぬ方々なので、誠に困つたものでございます、成程世界最終の大理想に逢着す

松居松葉先生……演劇放談

る樣な立派な言を仰有るのが、學者先生がたの御職分ではございませうかなれど、現在自分と時代を同うして居る人間が、罪人にならうが、堕落をしやうが、コチャ構やせんはチト手嚴しい話と考へられます、其癖私は『藝術は道德を超絶す』といふ立派な議論を主張せらるゝ或文學者先生からして、その御親類が妙な耳をした事を如何ど新聞へ出してくれるなと、わが同社員の某氏に哀願して來た事實を目擊して居ります如斯いふ學者には、或は新聞が何者にも超絶してる事になつてるのかも知れません

◎ソコて私はこんな學者先生がたの說には、餘り耳を傾けまいと決心致しました、私は勿論演劇を以て敎訓の道具とは思つて居りません、が、見す〳〵少年子女を誤まる害毒とするにも忍びません、私は芝居を以て清らかなる公衆の娛樂としたいと思ひます、そして姦通などゝいふ事は、決して清らかな事業てはないと信じて居ります

（菊島濃陰記）

Welcome ever smiles, and farewell goes out sighing

Shakespeare.

伊藤銀月先生

倭寇物語

詩的東京、美的小社會、東京繁昌記、人情觀的日本史の著者て、また百字文の開山である、伊藤銀月先生は、的切紅葉式の少しッンとした、女ならば、江戸ッ兒の生粹、辰巳ッ女てあらうとは、まだ見ぬ内の當推量

丸顏の小作りの（銀月氏曰く、五尺三寸七分あつて普通より肥えて居る小生が小作りとは）萬事が上方式てあらうとは、それも秋田の片田舍、龜田育ちと聞いては尙の事さてもく。さりとて、角のとれて玉のやうな點と、すつぱりとして、厭味のない處と、百字文的な俤がある

東京の別天地、築地の眞ん中に、瀟洒した家構、庇を越えて來る海の風は、スーッと四疊半を吹き拔いて、夏の夕の涼しさは、また格別

伊藤銀月先生……倭寇物語

伊藤銀月先生……優寇物語

『百字文ですか……あんなに盛んになつたのは、實に豫想外ですなに別に私が始めたと言ふほどでも……黒岩さんがなにか萬朝へ出すやうな新らしい懸賞物はあるまいかとの御話がありましたから、最初十九字詰、五行以内と謂ふ短文を募集したのです……て考へて見ますに、長文に對して、短文があつてもよからう……また文章の緊縮（コンデンス）を練習する――短かい文章の中に多くの意味を含ませる――には、短文も必要であらうと思ひまして……百字と制限して、百字文と命名しましたのは、十七字の俳句、三十一文字の和歌といふやうなもので、短文にも標準がなくてはやりにくい……百字位がよからう、百字文とすれば自然その標準もわかる……まあ、こんな積りでした！ところが百字文會といふものは出來る、百字文といふ雑誌は出る、攻撃もあれば、賛成もある……梅溪君でしたか……百字文の缺點を擧げられたやうですが美文などに就ては、別段さやうな弊はあるまいと思ひます！！説明的な文章は、別問題です！美文などは、趣味とか、餘韻とかいふものを尚みますから……百字文をやる心持――短かいものに多くの意味を含ませる――が必要のやうです』

余は豫て、百字文と俳句との間には、何となく似通つた點がある。從兄弟以上、兄

弟位の關係があるやうに思はれてならなかつた。銀月先生は、余が説に

『さうです、俳句の目的と百字文の目的は似て居ります……詩の短詩形は俳句であります……文の短形式は百字文ッたやうなものですから……』

と語りながら、銀月先生は、巧みに梨の皮をむいて、サア〳〵と勧められた。あゝ涼しい風が吹く

『都府研究てす？エ……人がそんな事を謂ふやうてすが、研究てもなんてもないのてす！ほんとの書きなぐりてす!!私が研究しやうと思ふ事の一部分てす!!!歴史と地理は私も好きてすから、出來るだけやつて見たいと思います……人情風俗的明治史てすか、これは戰爭後にしやうと思つて……今は倭寇――海賊史を少し調べて居ります！エー別に珍らしいといふやうな事もありませんが……面白い事はあります！

風に誘はれて、不斗縁先の闇を仰げば、眞珠を撒き散らしたやうな天の極少部分は涼しい瞬きを送つて、如何にも心地よげてある

『倭寇はつまり海の產物てすから……その海の事を調べるには、是非神代から

伊藤銀月先生……倭寇物語

やらればなりません！日本は海の國ですから、最初に征服した土地ですれ。今の淡路が、さうです……あれを根據地にして、二尊（ふたり）が前々に夫れから夫れへ、瀬戸内海を征服したやうです!!兎に角伊邪那岐、伊邪那美の尊は神代の大英雄でしたな……天照大神も、須佐之男命もさうです……此四人はなか〳〵偉らかつたやうです!!!夫れて此時分、朝鮮との交通は隨分盛んて……天孫人種も、土着の日本人も、男政な膨脹的の國民であつたやうです！彦火々出見の命が日向の高千穗の峰に降つたと謂ふのは、つまりあの附近一帶を征討に往かれたのです！神代史に、神武天皇の兄君に當る、いなひの命が、母の國海原に入るとしてありますが、あれは新羅の王になられたのです！實際神代史は詩的です!!日本人が遠征的で、遠民的で膨脹的である事は、實にその由來するところが久しいです！

併し、さん〳〵に支那朝鮮を苦めた倭寇なるものは遠征的冒險的なることに異論はないのですが惜しいことには遠大な着實な計畫がなかつたやうです！て和寇には二いろあつて、一つは押し懸けて往つて、金銀財寶を掠めて來るのです純粹の海賊的行爲ですな……それから最一つは、懇親的なやり方て、これ

は南北朝時代に多かつたやうてすが、うまり其時代に敗者の悲酸を嘗め盡した武士が自暴自棄になつたのです。夫れて、五六十人位な一團體を形つて、遠征するのです。それて船が向ふに着くと直ぐ船を燒てしまつて、生還を期せずと謂ふことを示すのです、それから此一團體が、四方八面に、人と言ふ人を斬り捲つて、殘ちず斬り死にをするまては戰つてゐるのですな、なんても此一團體が五六十人て五六千人位は殺してしまつたさうてす!!!又其區域は四百里四方位に渉つたさうてす！支那ては此團體が一番恐ろしかつたやうてす!!夫れはさうてしやう……唯人を斬ることが目的なんてすから……』

最う十時にも近からう、凉氣は潮の如く寄せて來る。而かも主客は、今やローマンチックとも謂つべき倭寇物語に、熱了せられた。微醺を帶びた、銀月先生の額は、輝て見ゆる

『所謂倭寇なるものは、元寇以來盛んになつたのてすな。此倭寇のことを書きますには、中心點が三ツあるのです！

その一つは今の朝鮮の始祖に當る、李成桂です！

それて朝鮮は關係が密接てあるだけ、それだけ倭寇も甚しかつたので、當時

伊藤銀月先生……倭寇物語

伊藤銀月先生……侯寇物語

の高麗王をして屢々都を移さやうとしたさうです。また其侯寇が猛悪であつたことは、一通りでなく、併し其目的が領土の獲得とか、敵國の顛覆とかいふのでなく、唯々財物を奪掠するとか家を焼たり、人を殺したりするのに過ぎなかつたのですから、二三回京城まで押し寄せたやうですが……そこからズーッと引き揚げてしまうのです。つまり高麗が倒れてしまつたのは、侯寇が最大原因になつたのです！

さうです！それに積極的の希望があつて、組織があり、統一があつたらば、朝鮮は、元より支那までも取ることが出来たでしやう!!

ところで此の李成桂はなか〳〵強かつたです！これには侯寇も折々撃退せられたやうです!!

次ぎの一人は、支那の王直といふ者です！侯寇には、随分九州四國中國邊の大名が誓り押しをしてゐましたから……中には千、二千、或は五千六千といふやうな大國體が大擧してやつて来くやうな事もあつたのですが、兎に角日本人ばかりでやつてゐたのです。そこが此王直が、自ら王と稱して横行してゐました點、餘程の力を持つてゐやもりで、トカ〳〵連合したのです！此

王直は一時松浦に居つて、同志を糾合してゐましたが、終に明朝の詐謀にかゝつて殺されてしまいました。一萬の日本人があれば明朝を顛覆することが出來ると、王直は言つてゐたさうです!!一度は大擧してやつて往つたのですが途中で、仲間喧嘩が出來る……船は散り〴〵になる……うまく行かなかつたやうです!!!

支那でも折々倭寇征伐軍を編制して、對つたが、倭寇が恐ろしいので、その荒らして行く、跡へ〳〵と廻つて、支那一流の、倭寇は最う退却したとか……または撃退したとか報告をしてゐたのですな……」

銀月先生は、苦茗一椀をすゝつて、更に梨一ケを平げたが。

「それから最一つは、伊豫の河野家です！河野十八家とか謂つて随分勢力があつたやうですが——さうです元寇の時の有名な河野通有の子孫です……さうですやり方は皆な通有流の趣きがあつたのです——その河野の一家の内に村上家といふのがあつて、これへあの北島顯家の子でしたかな……師房といふのが養子になりまして……それが非常な英雄で、常に侯寇の總指揮官になつてゐました

伊藤銀月先生……侯寇物語

伊藤観月先生……倭寇物語

元來河野家は以前から倭寇に關係があつたのですが、此時が最も勢威を振ふた時です！さうです、倭寇的精神は通有から遺傳的になつたものでしやうて、隨つて倭寇は、四國沿海が中心になつてゐました

此時分は、南北朝戰亂の餘弊を享けて、西海南海の諸大名は隨分疲弊してゐましたから、倭寇の脅り押しをしては幾分かの割前に與かつてゐたのです。倭寇が强かつたのも、一つはその邊のこともありましやう。併し倭寇も水軍をしては、かなはなかつたやうです、船も小さし、武器も劣つてゐたからその筈です……中にはなか〳〵詩的なことがあります！皆支那の本に出て居るのですが……倭寇の一團體の大將に、十五六歳位で、非常な美少年があつたさうです……しまいには討死をしたさうですが……また倭寇の中に胡蝶陣といふのがあつたさうです……之れはまた實に强かつたもので、その大將はいつも胡蝶の羽のやうな軍扇を持つて、丁度胡蝶の舞ふやうに指揮を司つて目覺ましい働きをしたさうです。そこで、支那も亦花和尚魯智深ツたやうな、鐵禪杖を振り廻す豪雄僧を大將にして攻め寄せたさうです。併し戰つては迚も勝てないから、大に奇謀を廻らして、頭に石榴の花を挿して、舞ひの手振り足取りで、胡蝶陣を迎

へるやうな風でやつて來たのです。胡蝶陣の大將は、變な事をして來る、が多分我軍を歡迎するのであらうと安心をして見てゐると、その石榴軍はだんだん近寄つて來て、胡蝶陣の大將の前へ近づくや否や、石榴軍の大將は、例の鐵禪杖を水車の如く振り廻して、一擊の下に大將を討ち取つてしまつたさうです、だうです詩的ではありませんか

また斯んな事も書てあるです……和寇は非常に輕捷で、而かも五尺の白刃を兩手に握つて電光の如く振り廻して來る、その有樣は、唯々一丈の白刃を見て倭寇其人を見ずと謂ふ壯觀で、向ふ處敵するものなしてあつたさうです!!!

エなか〳〵向ふの觀察は面白いです!!

だうか充分詩化して書きたいと思ひますが……だうも思ふやうには行きません！

町の仙女ですか、とても……あれは失敗です！もう小說は書きません!!結末ですが、多少の事實はあつたのです!!!あの豊太閤が遠征軍を起したのも、實は支那や朝鮮から倭寇を禁じてもらいたいと怨々頼んで來ましたので、嚴禁してしまつたのですが、その後、支那からも朝鮮からもカンともスンとも謂つて

伊藤銀月先生……愛玩物語

来ないそこで非常に怒って征伐しやう――つまり大掃除ですな――としたのです……それが大原因のやうてすが!!!

逸興歸るを忘れて居たが、夏の夜も餘程更けたらしい。強ひて辭し去うて、中天を仰げば、銀河流れて、我が懐に入るかの思ひてあつた。(三十七年八月十五日日田亞浪記)

A little philosophy inclineth a man's mind to Atheism but depth in philosophy bringeth mens minds about to religion.

Bacon.

Woman's grief is like a summer storm short as it is violent. Joana baille.

田口掬汀先生

頭を飾る病

數年以前の事でありましたが、一時我思想界の有識なる四五の評論家が口を揃へて日本人の思想的事業の最大缺陷といふものを痛論した事がありました、それは歸するところ『日本人は口に巧みにして手に拙である』と云ふのでありましたが、當時或文學雜誌を幹して、聊か評論壇の末班に列して居つた私なども此聲に愕かされて、今更の如く慌てゝ研究を始め先覺諸君の叫聲に唱和しながら、我國の藝術家が辯口巧みにして大甚しく實踐躬行の意氣がない所以を說いた事がありました、然るに此忌むべき風潮は今に至るも尙藝術界の一方に蟠つて、依然として進歩の妨げとなつて居るのであります、私は此事に就いて感じて居る事をお話致さうと思ふのです、尤も物質上の事は自ら別問題に屬するものと御承知を願ひたい

田口掬汀先生……頭を飾る病

偖其歓點と申すは何であるかと申しますると、夫は『頭ばかりを飾るの弊』と申す事であります、喩へて言へば拾錢の下駄を穿いて居ながら參圓の帽子を冠りたいと思ふ……と云ふやうなもので、進んで行く足の力と重心を支ふる頭の力とが一致しない、即ち言ふ事と行ふ事とが太甚しく懸放れて居る、これが日本の藝術家の大多數に共通するところの病弊であります、而して此忌むべく厭ふべき病弊は多數の美術家、詩人、小説家、批評家の良心を痲痺させて居るので御座いますが、玆に其のよつて來る處を稽へて見ますると之は明治年代に至つて俄に生じたものではない、既に千年以前の古へから流れ〳〵て現代に傳つたもので、申さば歴史的の病弊とも言ふ事が出來るのであります、隨つて其樣に長い間歴史の裏面を流れ來れる力である丈け人心に大なる影響を及ぼして居るのも自明の事でありますから、自由を欲する現代の藝術家は片時も早く此病弊を脱するやうにせねばならぬのも言迄もない、下に二三の歴史的證明を掲げて其病的思想の流れの跡をお話し致しませう、さて此千餘年來の變遷推移を目前に證據立てるものはと申しますると、それは奈良の建築と彫刻の二つであります

私が奈良に遊びましたのは僅か二三度に過ぎませぬが、そこに名高き古代建築を觀名匠の手に成れる塑像佛體を觀る度に、心私かに上古の民の堅實なる思想を揣摩し、ひとり嘆美の聲を漏らさぬ事はありませぬ、由來文學美術は其時代の思想を説明すべき唯一のものでありまして、正史に於て説き得ぬ微妙なる思想を窺ふには之に據らなければ出來ぬのは言ふまでもありませぬ、奈良朝の造形美術は其歌謡風詠に現はれて居る強健純朴なる思想の所産であつて、萬葉に收めた雄大の想を形に示したものであります、萬葉に收めた雄大の想を形に示したものでありませうか。

奈良朝の盛時に造られたる建築物の第一に觀者の眼を牽くものは、古色蒼然たるところでもなければ樣式の珍らしいところでない、雨淋風打千數百年の久しきに亘つて依然として傾かぬ其堅牢無比の形であります、一體奈良は其地勢からして風難震災の害を受ぐることの尠ないところであります、その建造物に精妙なる組織體形を具へて居るでなければ、如何して今まで其形を持續する事が出來るものでせうか、全く、彼時代の民は、總てのものに對して何年も堅實でなければならぬといふ觀念を主とし

田口掬汀先生……眼を瞬る病

たのであります、彼等は先づ萬代不動の礎石を作つて其上に建造物を据ゑました、如何なる微細の部分に對しても此用意を忘れなかつた爲に、其建造物は牢乎として地を拔けるもの、如く、毫も形を頽さずに長く現代に傳はる事を得たものであります

更に彫刻塑像の方面を窺ひますと、一層此關係が明かです、三月堂の不空羂索觀世音や博物館の十六羅漢の乾漆塑像や戒壇堂の四天王などを見ますると體形筋肉の工合毫も非難すべきところなく、分けても乾漆塑像の如きは何れの局所を割いて見るも美術解剖の法則に背く處がないのであります、其他の名作と稱せらるゝものは皆斯の如く、高遠の想を最も練熟したる製作の技術に托したもので、殆んど想技兩者の優劣を論ずる事が出來ぬ程なのです、要するに奈良朝時代の藝術家は未だ頭ばかりを飾る病に罹らなかつたので御座ります

處が之より降つて、平安朝中葉以後の物を觀ますると次第に「頭を飾る」傾向の生じ來れるのが見られるのです、前期の强健なる思想が此時代に漢土の文明の輸入せらるゝと共に漸々浮華に流れ、世は皮相の巧を衒ふとのみに走つて堅實の風を保つ事を

忘れたのは何人も知る通り、風詠は纖細になる建築は脆弱になる、彫刻も繪畫も著しく浮麗に流れ始めた、同じく奈良に遺つて居る時代の建造物を前者に比較して見ると、此期のものは其體形樣式に甚しき纖細巧緻の趣を加へ來れるとゝもに次第に礎石を閉却せる徑行が、明らかに人の眼に映る……彼等は頭のみを飾つて脚底を堅實にする事を忘れた……三重塔や東大寺大佛殿や其他平安時代に出來た建造物は、楹柱棚欄に華やかなる飾りを附けた代りに、下の礎石が著しく粗末になつて來た、言ひ換へると土臺の石を引拔いて屋根に上げたやうな遣り方になつた、塑像でも彫刻でも一つとして此例に漏れませぬので、上半身を割いて見れば優に千歲に傳ふる價値のあるものも足の方が甚だ怪しい、あゝ何うして此程の名作に足を附けたらう、半身像にして置いたならば遖れ千古の逸品となつたらうに、と思ふやうな物が多いのです、此の如く日本の藝術家は斯うして頭ばかりを飾ることを覺え、時代の裏面を流れ〳〵て室町時代に入つて最も盛んに、鎌倉時代より戰國の世に入つて、一度衰へたけれども、既に深く人心に刻みつけられた思想の痕跡は容易に拭ひ去らるゝ道理もなく、そゝに幾百年の間暗

田口掬汀先生……頭を飾る病

田口掬汀先生……頭を飾る病

暗の裡に潜んで今明治の時代に入るに及んで、再び勃然と起り立つたのであります

批評家も美術家も小説家も爭ふて頭を飾り始めました、矢鱈に西洋の文豪を引合ひに出し、しきりに洋語を振廻して箔をつけ勿體をつける、之が頭を飾るものでなくて何でありませう、慥に頭を飾る……必死に美くしい冠を戴いて醜い技術の面貌を隱し、巧みに人目を衒せしめやうとするもの滔々として皆之れであります、而して此頭を飾らうとするもの程いよ〳〵以て脚許がグラッイて居るのです、自國の文明、自國の社會、若くは最も近接したる自家の外圍をさへ解釋し得ず描寫し得ぬものに何うして脚許の確乎して居るものがありませうか、自國の事さへも解らぬ癖に西洋なんどを引合ひに出すのは誠に僭上の沙汰で且つ身の程知らずと云ふべきもので、私は斯う云ふ輩を鷄冠藝術家と呼びたいと思ひます、甚だ輕躁な名稱でありませうが頭ばかり美くしくしやうとする者には寧ろ適當の稱號であらうと信じますので、而して這種の輩ほど進歩の邪魔物となるものはありませぬ、また今の時代は不幸にして最も此種の學者や藝術家が多ひのであります

物、平を得されば滅ぶと申します、私は我多數の學者に拾錢の下駄に參圓の帽子を冠る心掛を轉倒して先づ脚底に心を用ひよと忠告したい、極端に言へば下駄を冠つて帽子を穿くの心掛があつて欲しい、前に擧げた奈良朝時代の建造物と平安朝のとを較べて靜思熟考を煩はしたいと思ふのであります（白田亜浪記）

Of every word the silent part is best of all expression that which cannot be expressed.

Story.

Nature never did betray the heart that loved her.

Wordsworth.

田口掬汀先生……頭を飾る病

向上の一路

野百合篇

マシュー、アーノルド曰く、詩は人生の批評なり（Poetry is the criticism of life.）と、人は翹楚のみにて生くるものに非ず、人生豈詩思詩情なかるべけんや、余の本篇ある所以は『青年と詩吟』と題する論文を一覧せらるれば、自ら瞭然たるべし、余は始め自ら和漢洋の詩を選せんと欲せり、顧て思ふ、是れ多く勞して少しく功を收むるの道なりと、乃ち專門の名家に計る所あり、多く勞せずして、自ら修養し、兼れて青年の諷誦に資するを得たり、余は此に謹て諸家の好意を謝す。

青年と詩吟

一夕、靖國神祠の邊に散策す、適ま一群の青年あり、大村益次郎の銅像を繞るベンチに凭れて、盛に詩を吟じつゝありき、之を聽くに、例に依て例の如く『醉枕窈窕

美人膝。醒握廟堂天下權』を反覆するのみ『醉枕窈窕美人膝』とは、黒岩先生の語を藉りていへば豈專ら『獸我』を滿足せしむるものに非ずや、漢詩人は酒の字を除非すれば、詩を作る能はず、賣淫婦を意味したる美人の字を除非すれば、詩を作る能はずといへり、漢詩人は所謂美人を以て『解語花』と稱し、珠簾彫檻、山軟水溫、揚州花月の境に留連し、楚腰纖細掌中に輕きを以て、最も得意の事と爲したり、然れども今日の眼を以て見れば、其『解語花』なるものは『解語獸』なるに非ざるなき耶、今の青年は斯かる詩句を唾棄せざるべからず、其喜て之を朗誦するは、余何の意なるかを知るに苦しむ『醒握廟堂天下權』に至ては、聊か當年志士の氣象を察すべきものありと雖も、時勢は自ら異れり、手に唾して功名富貴を取るは、之を維新革命の混沌時代に期すべくして、社會の秩序既に立ちたる今日に於て、之を實現せんとするは、木に緣て魚を求むるよりも難し

我國民の間に最も傳誦せらるゝは、賴襄の詩なり、『鞭聲肅々』といひ『雲耶山耶』といひ『兵兒歌』といひ、皆之を劍舞に上すに至れり、山陽外史は國民的詩人なり、他の

漢詩人が唐詩の藩籬を脫する能はず、我國民的生活と全く關繫なき『出塞行』を歌ひ、『從軍行』を歌ひつゝあるに際し、烟眼を撥して、其詩題を我歷史に採りたるは、眞に敬服すべし、日本外史は漢文を以て書かれたり、而して二者孰れか多く國民に讀まれたるかは、當時漢文崇拜の世なりしとはいへ、俄に判すべからざるものあるは何ぞ、山陽が國民的詩人にして、其無韻の詩たる日本外史は、確に時代の精神を呼吸し、國民の琴線に觸れて、微妙の天樂を奏でたれば、何人も傾耳すべくチヤームせられたればなり、其詩に於ける亦猶此の如きのみ、而して其詩が今日猶家傳戶誦せらるゝは、全く過去の惰勢のみ、山陽の詩は清人黃公度の評したるが如く、中に萬古の精神ありと雖も、其史論、史眼は果して吾人の一々首肯すべきものなる耶、而して『雲耶山耶』の如きは、殆ど古詩の法則を無視したるのみならず、其敘景、亦必ずしも神に入りたりと謂ふべからず

若し夫れ、我青年にして、間々『寶刀難』染洋夷血』を歌ふものあるに至ては、時代を知らざるの甚しきに驚かざるを得ず、極東の文明國を以て、歐洲の野蠻國を膺懲し

『黄禍』を天下に宣傳しつゝあるに方て、攘夷精神を歌ふは、無稽も亦極まれるに非ずや

余は我青年が西詩を學ばんことを勸告するものなり、然れども一般に西詩を朗吟するの風を興すは尚難し、國民の歌は、國民の言語を以て歌ふべし、余は新詩人に屬望する所、從つて大ならざるを得ず、然れども新詩にして未だ能く予を起すものを見ず蓋し之あらん、余未だ之を見ざるなり、然らば則ち、我青年が依然として『醉枕』を唱へ『鞭聲肅々』を唱へ『寶刀難染』を唱ふるは何ぞ、今の青年の識見學術は既に此等の詩を超越せりと雖も、之に代るものを與へざるが爲に非ざるなきを得んや

一面には、物質主義の大勢、滔々として至り、我社會は殆ど其重瀾層濤の漂はす所と爲るにも拘らず、一面には『精神的向上の時代』は、方に天明を報ぜり、宗教とは何ぞ、哲學とは何ぞ、宇宙とは何ぞ、人生とは何ぞ、死とは何ぞ、生とは何ぞとは、屢ば我青年に與ふるの詩は、即ち此問題を解釋するに足り、我青年の『人我』を滿足せしめ併せて『神我』を滿足せしむるものならざるべからず、坐せよ我青年、聽けよ青年、我

が起て朗吟する橫井小楠の詩を聽けよ

帝生萬物靈使之亮天工所以志趣大神飛六合中

又

道既無形體心何有拘泥達人能明了總順天地勢

小楠は熊本の人、維新時代の思想家なり、國を擧げて、開國と攘夷、佐幕と勤王とに勢するに方て、一躍潑剌、世界的眼孔を開き來りて、『帝生萬物靈』と歌ひ、『道既無形體』を喝破す、勝海舟が此五言の小詩を讀て、其識見の高朗超邁なるに嘆服したりと傳ふる、豈偶然ならんや、前詩は是れ豈人は自ら動いて、天地の化育に參し、宇宙の向上を助けざるべからざる宗教觀に非らずや、後詩は今の偏狹論者に痛棒を喫せしむるものに非ずや、耶は佛を罵り、佛は耶を罵り、儒家は道家を罵り、道家は儒家を罵り、スペンサーはカントを罵り、各好む所に偏し、吾佛尊しとして、相爭ふは、焉ぞ達人の一笑を免れんや、宇宙は無邊なり、人事は複雜なり、惟心論も、惟物論も、一元論も二元論も、有神論も無神論も、世界主義も國家主義も、帝國主義も社會主義

も個人主義も、皆各其處を得て調和するの餘地あるに非ずや、其「渾順天地勢」とは、決して放任論に非ず、蓋しベーコンが自然を制せんと欲すれば、先づ自然に從ふべし（Nature is commanded by obeying her）の語は、移して以て此詩の註脚と爲すべし

詩極めて平易、一讀了々たるべし、其他

不レ流ニ功利一不レ流レ禪。大丈夫心希ニ聖賢一。盡ニ得終生堅苦力一。欲下披ニ雲霧一見中青天上

心官唯是思。思則眞理生。或在ニ一身上一。又入ニ天下平一。古今天地事。莫レ不レ關ニ吾情一。寂然一室中。意象極分明。

又

神智靈覺湧如レ泉。不レ用ニ作爲一付ニ自然一。前世當世更後世。通ニ觀三世一對ニ上天一。

又

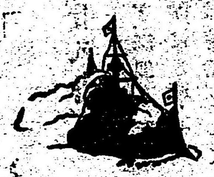
奉レ命孤身千里身。青山碧海一望春。此行唯欲レ盡ニ心事一。成否在レ天不レ在レ人。

（此時は小楠が松平春嶽侯に聘せられ、越前に赴きし時の作なり）

又

智唯在レ選レ善。選レ善即執レ中。何以執ニ其中一。方寸一字公。是レ彼又非レ此。是非一方偏。姑置ニ是非心一。心虛則見レ天。

之を純詩として批許し、之を文字の美術として觀察すれば、固より大なる缺點あり と雖も、小楠は詩人に非ず、詩の美術を以て小楠を論ずべからず、而して其詩中に含蓄する所の宇宙觀、人生觀に至ては、先輩朱舜水、王陽明、陸象山と雖も、必ず多くの異議なかるべきを信ず、小楠曰く「群壑亂山總草茸。奇觀何處立ニ斯笻一。愛來大丈夫心事。寄在ニ芙蓉第一峰一。」男兒の精神志氣は高更に高なるを厭はざるに非ずや（三十七年七月）



岩溪裳川先生

愛誦漢詩（唐廿八首）

茅原華山兄、予が僑居を過ぎ、瞬偶々唐賢の絶句に及び、予が平生愛誦するもの二三十首を抄出せんことを請はる、予一一案に就き、一首を誦し、二十八首を得たり、夫れ二十八宿の天に麗き、煥然爛然として文を成し、萬古に其光芒の輝く如く、百世の下、其詩を讀みて、一代人文の盛を瞻仰せしむ、兄の錄し終りたるを以て、其由を爰に記るす、予が寡陋を以て、之を記廬に取る、必ず遺珠あらん、慚々愧々

涼州詞　王翰

蒲桃美酒夜光杯、欲レ飲琵琶馬上催、醉臥二沙場一君莫レ笑、古來征戰幾人回、

下江陵　李白

朝辭二白帝一彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿聲啼不レ住、輕舟已過萬重山、

長信宮詞　王昌齡　奉レ帚平明金殿開、且將二團扇一共徘徊、玉顏不レ及寒鴉色、猶帶二昭陽日影一來、

送二元二使一安西一　王維

渭城朝雨浥二輕塵一、客舍青青柳色新、勸レ君更盡二一杯酒一、西出二陽關一無二故人一、

涼州詞　王之渙

黃河遠上白雲間、一片孤城萬仞山、羌笛何須怨二楊柳一、春光不レ度二玉門關一、

和嚴鄭公軍城早秋　杜甫

虜騎秋風入、邊城早作レ寒、霜嚴二白草一折、月苦二青冢一乾、勢逼二金微一遠、聲連二鐵鎖一難、將軍能射レ虎、不レ獵二祁連山一、

虜營已收二滴博雲間一、戍鼓更奪二蓬婆雪外一、城第一盞萬口無異辭。予今有感

三月尋李九莊　常建

三月尋李九、莊前雨歇、故人家在レ桃花岸、直到二門前一、溪水流、

塞上聞笛　高適

雪淨胡天牧レ馬還、月明羌笛戍樓間、借レ問梅花何處落、風吹一夜滿二關山一、

封大夫破播仙凱歌　岑參

日落轅門鼓角鳴、千群萬隊繞二蕃城一、洗レ兵海雲迎レ陣黑、秣レ馬龍堆月照レ營、

巴陵與李十二裹九汎洞庭　賈至
楓岸紛紛落葉多洞庭
秋水晩來波乘興輕舟無近遠
白雲明月吊湘娥

滁州西澗　韋應物
獨憐幽草澗邊生上有黃鸝深樹鳴春潮
帶雨晩來急野渡無人舟自横

過鄭山人所居　劉長卿
寂寂孤鶯啼杏園寥寥一犬吠桃源
落花芳草無尋處萬壑千峰獨閉門

歸雁錢起
瀟湘何事等閑回水碧沙明兩岸苔二十五絃

彈夜月不勝清怨却飛來

宿石邑山中　韓翃
浮雲不共此山齊上山霑蒼蒼望轉迷曉
月暫飛千樹裏秋河隔在數峰西

君平絕句中寒貪詩最傷炎人口當時明皇爲其詩能識其名然予所好在此篇也

聽曉角　李益
邊霜昨夜墮吹入小單于

君漢絕句人皆以回樂峰前爲狀元以天山雪後爲探花然予却以是推登科第一

鴻飛不度秋風吹入小單于

湘南即事　戴叔倫
蘆橘花開楓葉衰出門何處望京師沅湘

日夜東流去不爲愁人住少時

竹枝詞　李涉
十二峰頭月欲低空船灘上子規啼孤舟一

夜東歸客泣向春風憶建溪

過華清宮　李約
君王遊樂萬幾清一曲霓裳四海兵玉輦

升天人已盡故宮猶有樹長生

次潼關先寄張十二閣老　韓愈
荆山已去華山來日照三潼

關四扇開刺史莫辭迎候遠相公新破蔡州回

退之七絕以詩論之則早卷及題楚昭王廟二絕或可

酬曹侍御　柳宗元
無限瀟湘意欲採蘋花不自由

破額山前碧玉流蠻人遙駐木蘭舟春風

石頭城　劉禹錫
山圍故國周遭在潮打空城寂寞回淮水東

邊舊時月夜深還過女牆來

元相公輓歌詞　白居易
後魏帝孫唐宰相六年七月葬咸陽

銘旌官重威儀盛旛吹聲繁鹵簿長

聞白樂天左降江州司馬　元稹

君謫九江垂死病中驚起坐暗風吹雨入寒窓

登樂遊原　杜牧

漢家何事業五陵無樹起秋風（予至牧之詩心頗迷採清時有味乎採千里鵬程之意乎又採烟籠寒水乎暫定此詩未能自知取捨之得當否）

夜雨寄北　李商隱

君問歸期未有期巴山夜雨漲秋池何當共剪西窓燭却話巴山夜雨時

贈少年　溫庭筠

江海相逢客根多秋風葉下洞庭波酒酣夜別淮陰市月照高樓一曲歌

楚宮怨　許渾

舞君王醉白日秦兵天上來（二人若論用晦詩必先唱勞歌一曲二十八字予以爲不及此詩）

淮上與友人別　鄭谷

楊子江頭楊柳春楊花愁殺渡江人

此外張籍涼州詞王建十五夜望月寶牟奉誠園閒笛賈島渡桑乾張喬華清宮鮑溶贈楊錬師雍陶和孫明府懷舊山孟遲閨情諸篇皆予平生所愛誦非敢爲軒輊也讀者諒焉

森槐南先生愛誦漢詩

愛誦漢詩（宋以下二十首）

宋

鄭文寶　亭亭書舸繫春潭。只待行人酒半酣。不管煙波與風雨。載將離恨過江南。

蘇舜欽　春陰垂野草青青。時有幽花一樹明。晚泊孤舟古祠下。滿川風雨看潮生。

王安石　玉斧修成寶月團。月邊仍有女乘鸞。青冥風露非人世。髣髴衣裳帶羽寒。

蘇軾　竹外桃花三兩枝。春江水暖鴨先知。蒌蒿滿地蘆芽短。正是河豚欲上時。

黃庭堅　春風十里珠簾捲。揚州風物驀成絲。臼髮先朝舊史官。風爐煮茗暮江寒。蒼龍不復從天下。拭淚看君小鳳團。

韓駒　陸游　家祭無忘告乃翁。死去元知萬事空。但悲不見九州同。王師北定中原日。

范成大　高陵深谷變遷中。佛刼仙塵事事空。一水清流獨如帶。天應留作漢堤封。

姜夔　自愛新詞韻最嬌。小紅低唱我吹簫。曲終過盡松陵路。回首煙波十四橋。

金

元好問　平世何曾有稗官。亂來史筆亦燒殘。百年遺稿天留在。拋向空山一掩淚看。

元
趙孟頫　春寒惻惻掩二重門一金鴨香殘火尚温燕子不レ來花又落一庭風雨自黄昏
虞集　屏風圍坐髮鬅鬙絳蠟搖レ光照二暮酣一京國多年情盡改忽聽二春雨一憶二江南一
楊維楨　江南處處烽煙起海上年年御酒來如レ此烽煙如レ此酒
老夫懷抱幾時開
顧瑛　儒衣僧帽道人鞋天下青山骨可レ埋若說二舊時豪俠興一五陵裘馬洛陽街
袁凱
明
高啓　女奴扶レ醉踏二蒼苔一明月西園侍レ宴回小犬隔レ花空吠レ影夜深宮禁有レ誰來
上林木落雁南飛萬里蕭條使節歸猶有二交情兩行淚一

西風吹上漢臣衣
李夢陽　中山孺子倚二新妝一鄭女燕姬獨擅場齊唱憲王新樂府
金梁橋外月如レ霜
清
錢謙益　舞榭歌臺羅綺叢都無二人跡一有二春風一踏青無限傷心事
併入南朝落照中
王士禎　江干多是釣人居柳陌菱塘一帶疎好是日斜風定後
半江紅樹賣二鱸魚一
沈德潛　到處陂塘決決流垂楊百里罨二平疇一行人便覺須眉綠
一路蟬聲過二許州一

竹柏園主人愛誦歌

愛誦歌

岡上の一時

○

聖德太子(日本紀)

科てる　片岡山に　飯に飢て臥せる　其旅人あはれ　親なしに　汝生りけめや　さす竹の　君はや無き　飯に飢て　臥せる其旅人あはれ

○

山上憶良(萬葉集)

風まじり　雨ふる夜の　雨まじり　雪ふる夜は　すべもなく　寒くしあれば　堅鹽を　とりつゞしろひ　柏湯酒　打すゝろひて　しはぶかひ　鼻びしゞにしかとあらぬ　髯かき撫でい　吾をおきて　人はあらじと　ほころへど　寒くしあれば麻衾　引きかゞふり　布肩衣　有りのことごと着そへども　寒き夜すらを　我よりも　貧しき人の　父母は飢寒からん　妻子どもは　乞ひて泣くらん　此時はいかにし

つゝか　汝が世は泣る　天地は　廣しといへど　吾爲は　狹くや成りぬる　日月は　明しといへど　吾爲は　照りや給はぬ　人皆か　我のみや然る　わくらはに　人とはあるを　人並に　あれもなれるを　綿もなき　布肩衣の　海松のごと　わゝけさがれる　かゞふのみ　肩に打かけ　ふせ庵の　曲庵の内に　ひた土に　藁とき敷きて　父母は　枕の方に　妻子どもは　あとのべに　かくみゐて　憂へさまよひ　かまどには　煙ふきたてず　こしきには　蜘蛛の巢かきて　飯かしぐ　事も忘れて　ぬえ鳥の　のどよひをるに　いとのきて　短き物を　端切ると　いへるが如く　しもと取る　里長が聲は　閨どまで　來立ち呼ばひぬ　かくばかり　すべなき物か　世の中の道

○

作者不詳(日本紀)

から國の　柵の邊に　立ちて大葉子は　領巾振らすも　日本へむきて

山上憶良(萬葉集)

しろがねもこがねも玉も何せんに
まされる寶子にしかめやも

○

富人の家の子どものきる身なみ
くだしすつらんきぬ綿らはも　笠朝臣金村(同)

○

丈夫の弓末ふりおこし射つる矢を
後見む人はかたりつぐがね　大伴宿禰家持(同)

○

丈夫は名をし立つべし後の世に
きゝつぐ人もかたりつぐがね

劍太刀いよいとぐべし古へゆ
さやけくおひて來にしその名ぞ

○

唐國に行きたらはしてかへりこん
ますら猛雄にみきたてまつる　多治比眞人廣主(同)

○

わかせこは物な思ほし事しあらば
火にも水にも我なけなくに　よみ人しらず(拾遺集)

○

手枕のすき間の風も寒かりき
身はならはしの物にぞありける　前内大臣藤俊(新葉集)

○

きみかためわがとり來つるあづさ弓
もとの都に歸さゝらめや　よみ人しらず(今昔物語)

○

父母（かせいろは）あはれとも見よ燕すら
二人は人に契らぬものを
源頼政（句題和歌）

○

深山木の其梢とも見えざりし
櫻は花にあらはれにけり
鎌倉右大臣實朝（金槐集）

○

山はさけ海はあせなん世なりとも
君にふた心われあらめやも
ものゝふの矢なみつくらふ籠手の上に
あられたばしる那須の篠原
大海の磯もとゞろによる浪の
われて砕けてさけてちるかも
寂身法師（家集）

○

たをらじな人の垣根の梅の花
われにてしりぬ惜しきこゝろは
蒲生氏郷（家集）

○

かきりあれば吹かねど花はちるものを
心みじかきはるの山かぜ
熊澤蕃山（家集）

○

うき事のなほこの上につもれかし
かぎりある身の力ためさむ
園珠庵契沖（漫吟集）

○

富士のねは山の王にて高御座（たかみくら）
そらにかけたる雪のきぬがさ
賀茂眞淵（家集）

○

うら〳〵とのどけき春の心より

にほひ出たる山ざくら花
もろこしの人に見せばや三吉野の
吉野の山のさくら花
見おろせばしもつ千里の隈もなし
ふりぬる書や高根なるらむ
信濃なる昔の荒野を飛ぶ鷲の
つはさもたわに吹く嵐哉
○
天の原吹すさみたる秋風に
走る雲あればたゆたふ雲あり
○
さしいづる此日の本の光より
こは唐土も春を知るらむ

浦取魚彦（家集）

本居宣長（鈴屋集）

わたの原島の八十島よもの國
ひかりあまねく天てらす神

加藤千蔭

○
あしがらの神のみ坂をこえてしも
猶ふしのねは雲井なりけり

少將源定信（三草集）

○
埋火のあたりのどかに兄弟の
まとゐせしよぞこひしかりける

伴蒿蹊（閑田詠草）

○
するつひに海となるべき山水も
しばし木の葉の下くぐるなり

加納諸平（柿園詠草）

○
若草のみづのみ牧の放ち駒

誰かとる鞭に千里ゆくらむ
みつち住む淵を千尋の底に見て
太刀の緒かためゆく山路哉　伊達千廣（隨緣集）

○

しられずば知られずとてもさてあらむ
知られたりともまことなき名は　橘曙覽（志濃夫之舍集）

○

燈火のもとに夜な〳〵來れ鬼
我ひめうたの限きかせむ
國をおもひねられざる夜の霜の色
月さす窓に見る劍かな
蟻と蟻うなつきあひて何か事
ありげに走る西へ東へ

○

何處かは思ひの家にあらざらむ
よそめ樂しき世にこそありけれ　香川景樹（桂園一枝）

二方に靡きそろひて花薄
風ふく時ぞ亂れざりける　木下幸文（亮々遺稿）

○

益荒雄のをのこさびすと打あげて
泣かぬ心ぞまことと悲しき

天地に溢るばかりの黃金もが
世の人皆をあきたらはさむ

思ふ事はやもならなん今日の日の
うれしき人に報いせむ爲　孝明天皇御製

戈とりて守れ武夫九重の
みはしの櫻風そよぐなり　伊林光平（殖継遠草）

○

武士のかばね草むす荒野らに
さきこそ匂へ大和撫子　鹽田藤蔵（同）

○

武藏野のあなたこなたに道はあれど
わが行く道は大丈夫の道　戸原継明（同）

○

つるぎたちさやにおさめて武夫の
とがまほしきは心なりけり　野村望東尼（同）

○

一度は野分の風のはらはずば

清くほならじ秋の大空
かたがたにわだかまりたる雲の間を
かたよりもせですぐる月かな　福田行誡（浮雲集）

○

我袖の玉とひろひてつゝまばや
うちつけられし石も瓦も

法の海よしいかばかり深くとも
汲みほすまてはくまんとぞ思ふ　佐々木弘綱

○

箱根山のぼるみ坂の石かどの
一つ〳〵に苦しかりけり

うき草をよそに拂ひて大澤の
池の心を廣くもたばや

平木白星先生
愛誦新體詩
希望

土井晩翠

沖の汐風吹きあれて
白波いたくほゆるとき、
夕月波にしづむとき、
黒暗よもを襲ふとき、
空のあなたにわが舟を
導く星の光あり。

ながき我世の夢さめて
むくろの土に返るとき、
心のなやみ終るとき、
罪のほだしの解くるとき、
墓のあなたに我魂を
導く神の御聲あり。

嘆き、わづらひ、くるしみの
海にいのちの舟うけて
夢にも泣くか塵の子よ、
浮世の波の仇騒ぎ
雨風いかにあらぶとも
忍べ、とこよの花にほふ。

平木白星先生愛譜新體詩……希望

朝戸

港入江の春告げて、
流るゝ川に言葉あり、
燃ゆる焔に思想あり、
空行く雲に啓示あり、
夜半の嵐に諫誡あり、
人の心に希望あり。

あら無禮ぞ何者ぞ
我庵揺すりて我門よぎる
青斑の虎毛の馬七つ
黄金の寶車、銀の輪

與謝野鐵幹

平木白星先生愛譜新體詩……朝戸

繁き葦の天玉の函
載するは天秘の誰が詩なれば
五百の天童跣足きよう
紅衣そばゆく樂を執る

昨夜江東人を送る會
主人野服して衆に混る
左の手に燒鷄の脚しやぶり
大きなる杯酒の熱き酔ざず
筆を取つては七尺の金屏
警句さながら龍と飛ぶ
この國人を低うす
往け往け我友

平木白星先生愛譲新體詩……朝月

笑ふか名は何頬白の貴公子
わが爲め更に墨すれ

美女す人昇ぎ載せて
酔ひしが危し二里の車
家君例のと眉も顰めず
優手に重きを抱き入れて
里の霜夜の小枕

木がらし軒聲と何れ高き
あなやと目覺めて朝戸推せば
神人の夢跡も無うて
昨夜の入興の我痴耄け
醉の牛の愚に似たり

平木白星先生愛譲新體詩……酔歌

酔歌

島崎藤村

旅と旅との君や我
君と我とのなかなれば
酔ふて袂の歌草を
醒めての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間に
樂しき春は老いやすし
誰が身にもてる賓ぞや
君くれなゐのかほばせは

平木白星先生愛誦新體詩……譯歌

君がまなこに涙あり
君が眉には憂愁あり
堅く結べるその口も
それ聲も無きなげきあり

名もなき道を說くなかれ
名もなき旅を行くなかれ
甲斐なきことをなげくより
來りて美き酒に泣け

光もあらぬ春の日の
獨りさみしきものぐるひ
悲しき味の世の習慣

平木白星先生愛誦新體詩……譯歌

若いにはらしき旅人よ
心の春の燃ゆる火に
若き命を照らし見よ
さくまを待たで花散らば
良しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く
君の行衛はいづこぞや
薬酒のあるものを
とまりたまへ旅人よ

海

内村鑑三

海よ、海よ、我を寛くせよ、
俗界の權者我を擯にし、
その古俗と舊習とは我を檻し、
我をして我が羽翼を伸し得ざらしむ
我は海鷗の自由を慕ふなり、
我は闊濶の飛力を羨むなり、
無窮の靈を有する我は、
此歷迫狹隘に堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を清くせよ、

腐敗は平原都城を襲へり、
山間の仙境亦陋習に化せり、
浩然の氣我今之を全土に求むる能はず
洋々面到る處酸氣多し、
海上波靜かなる時風に香味あり、
清淨を愛する我の靈は、
此穢此汚に堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を強くせよ、
配慮は我の英氣を挫けり、
辛勞は我の思惟を壓せり、
我精我筋將に縮滅せんと欲す
濤上風に逆ふ時我に膽力生る、

平木白星先生謹愛新體詩……夕暮海邊に立ちて

船頭梶を御する時我に恐怖なし、
活動を要する我の生は、
此歌此弱に堪ゆる能はざるなり。

夕暮海邊に立ちて

薄田泣菫

直黄、丹摺、紫
雲、藍色に收まり、
日の影徐かに薄れ行けば、
黄金浮けし波の穗の
揺ぎも底に障ろび、
小兵の里のみくり出でて、
遙かき空に光る
外、

夜の幕全く空を閉ぢ、
島は暗き宿る巖、
流れ綫き淵の上、
倦ずる腕に揖をとりて、
白く光る鮮の
跳ねかへる音を聞きつゝ、
今漕ぎ歸るが蜑の子ら、
闇き浪路の夕暮、
わが岸柯れと惑よらんよ。

平木白星先生愛誦新體詩……夕暮海邊に立ちて

磯に立てる荒屋、
邊は早く眠りて、
重

平木白星先生愛誦新體詩……夕暮海邊に立ちて

女房厨屋に隙や得たる、
形よき貝の〳〵火盤を、
南の窓に點じ、
舟漕ぐ目路にと輕くすゑぬ。
渇仰あつき比丘尼の、
法會にともせる燭の如く。

夜次第に擴がり、
引汐走る音の、
異聞に知らるゝ海のかなた、
白き手すがる丘の上に、
低き光の目標に、
船人かへると思ひやれば、

胸に泌み入る平和に、
おぼえず涙を巖に墜れぬ。

大塚楠緒子

夜

鬼ありそこに呪ふべく、
罪ありそこに榮ゆべく、
悔ありそこに悶ゆべく、
戀ありそこに狂ふべく、
日の影恥づる人の子の、
地にひれ伏すそのなやみ、
思ひのまゝにうちなやむ、
秘密をかたく閉さんと、

平木白星先生愛誦新體詩……夜

鶏ふがごと忍ぶごと
音なく落す黒布は
あゝ光なき夜のめぐみ
夜の慈愛にあらざるや

微笑

正、岡子規

腹かつさばき死せと言ふ。
我は得死なし、逼るとも
頭を觸れて、大磐石
砕けて死せよ。せじ、それも。
沈め、水に。絞れ、木に。

鐵砲吾を打つ眉根。
よし、苦を言はじ、藥あり。
暖き夢、寒き骨。

否。我死なじ。ながらへて、
世に卑怯とぞ笑はれん。
暗き人屋に、苦にも堪べ、
乞食に落つる恥も運。

されど我てゝに世の闇路、
斷頭臺に、問はず、非と是。
上れとならば上るべし、
悠然としてゝ春の風。

平木白星先生謹新體詩……微笑

白刃頭に擬す刹那、
泣かじ、めゝしく、怒氣面に、
慷慨罵言せじ。さはれさは
枯木ならんや、しかすがに。

ともし火將に消えんとし、
又くわっと照る、物の情、
再び歸らぬ身のかたみ、
此世に殘す、只微笑。

只微笑、靜かで靜心。
たくみ出だされん此一事、
集まり來る妄想を
排す可く要す、二十四時。

死と定まりぬ。翌の今、
朝日に草の露と消えば、
百事、萬事、望み、あゝ、
一生の事業、今半。

あらゆる夢の我を攻む、
過去の追想四十年。
戰ひ必ず起るべく、
未來を隱す地平線。

あわや倒れん、其儘に。

平木白星先生謹新體詩……微笑

同上の一路

頭腦焚え、鉄胸を焼く。
苦し、狂亂の我思ひ、
毛髪竪つて、皆裂く。
やがて靜まる、うつら〳〵。
知らず、時過ぎ、時來る。
足冷え、手冷え、寒き肌、
再び我に返る夜。
夜しん〳〵、灯かすかなり。
淋しく青き月の色、
汝は翌照らん、我無しに。
行くや我汝を見ぬ處。

野百合篇

露も殘らじ、世に未練、
萬物我に負く今。
王位珍寶何かあらん。
別れかねたりや、いとし妻。

可憐なる女、いとし妻、
哀れ翌よりの新やもめ。
さりとも逢はんたま〳〵は、
つめたき汝が闇の夢。

死なば共に、と契りしは、
昔ある夜のさゝめ言、
我死にし後に氣を病むな、

風引くな、とは憂き誠。

坊よ。汝か欲しき物を言へ。

人形か、書か、造り花。

てうち〳〵、さこそ上手なれ、一

むつがりて母を惱ますな。

犧牲となりて、父は世に

殺されし事をな忘れそ。

父の子ならば、死を誓ひ、

名を現せよ、家の父祖。

我友よ。我復言はず。

天下の事は汝在り。

思へば昨日になりにける、

梅の遠乘、小鳥狩。

來れ、忠僕、來れ、下婢。

接吻せずや、近く來て。

「しやき」も來よ、こゝへ。吠えよ「しやき」、

最期の別れ、與へよ、手。

讀みさし、書に栞せよ。

書齋の壁に捲くな、地圖。

我亡き後も、朝を夕を、

盆栽の花にそゝげ、水。

唯一つ殘る星と共に、
幻消ゆる妻や子や。
思ふ事無しと、鴉鳴き、
晨朝の鐘鳴る人屋。

夜は明けにけり。旭さら〳〵
我に新らしき生命を、
與ふべき清き光かな。
死の時到る、安き顏。

一分動く、命一分。
悔無し、心、水の如く。
一秒遲る、死一呼。

斷頭臺、三尺の空、
洋々として業を聞く。

惡を爲さず。豈天帝を
恐ると言はん。作善慈悲、
佛に媚ぶるならじ、もと。
死も賴みあり、生亦非。

神を祈らず、我昔て、
我を救はん、神いかで。
釋迦に歸依せず、釋迦我を
導かんや、西、幷土迄。

見えず十字架、下りず耶蘇。
ほとけ既に無し、況んや魔。
紫雲來迎あらばこそ
獨立獨歩、他に待たず。
金石透す志。
主義のため今我斃る。
日月かゝやき天青し。

我、人に愧ぢず、我に
生前の霜、死後の春。
大丈夫、あゝ、餘榮あり。
我知らず、微笑を入に成る。

蓬萊山頂

（蓬萊曲の一歌）

北村透谷

（柳田素雄山頂に達して四望眺瞰する所）

素雄

大地は渺々、天は漠々、
三界諸天の境際明らかなり。
萬景萬色一樣になりて廣がりつ、
山河都邑無差別夜陰の中。」
六道八維雲に隱れ雲に現はれつ、
凡てわが脚下に瞰おろすなり。
鐵圍——金剛——須彌、——幻現二界の中に眺る。
無邊無涯無方の佛法も、玄々無色の自然も、
この靈山に於てこそ悟るなれ。

こざかしき小鬼！　無益なる世の智慧！
大地大ならず、蒼天高からず！
我眼！　我心眼！　今神に入れよ、
この瞬時をわが生命の鍵とせん。」
いで御雪を蹈立てゝ彼方なる危巖の上に立たむ。

（危巖の上に登る）

（雪崩の響凄まし）

大地今崩壞るや？
用なき大地今崩壞るや？
くづるゝも惜からず。いな、いな、いな、
聞くは雪崩の響なり。」

（俯瞰して）

底は見えず斷崖幾千仞、

誰が立掛しぞこの壁を。
鬼神とても、よもやこゝをば飛登らじ、
電光とても鳴神とても、この山側には住まざらむ。
思へばわが身は羽毛ならねに、
雪さへ積れるこの巖の、角に立つとは如何、如何。
人か？　神か？　人の世は夙く去りて神の世や來れる？
神ならねば、いかで、この業は？
神かわれ？　われ神か？　呵！
呵！　いかてこのわれ！
依々形骸あり！　形骸、形骸！
塵の形骸！　昨日の儘の塵の形骸！　呵、なほ人なる。
われ神ならず。天地の神は父なる。
いて父を呼ばむ、神を祈らむ。）

平木白星先生愛誦新體詩……蓬萊山頂

（巖上に危坐して祈請す）

天地に盈つる靈、照覽あれ、
日を鐫り、月を圓めしもの、耳を傾け玉へ、
われ世の形骸を脫ぎ去らんと願ふこと久し。
靈山に上りて、魂は、魂は淨められしかども、
未だ存る形骸やわが仇の巢なる。
惡鬼夜叉に攻め立られて今迄の生命は、長き一夜の、寢られぬ暗の中。
脫去らしてよ、この形骸、この形骸！
雪ぐ可き恥辱の山高み。
拂ふ可き迷の虛空廣み。
形骸ゆゑぞ、形骸ゆゑぞ、
脫去らしてよ、この形骸、この形骸！」

（附言）

平木白星先生愛誦新體詩……蓬萊山頂

向上的若くは崇天的精神を以て作られし詩歌の中に、この厭世思想の一篇を加へしを咎むる勿れ、篇中の主人公柳田某が、小我の形體を脫して大我に合せんと煩悶するは、特殊なる向上的精神にあらざるなきか、蓬山先生、冀くば高教を垂れよ

白星

佐藤紅緑先生

愛誦俳句

荒海や佐渡に横ふ天の川　芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉

櫻咲く頃鳥足二本馬四本　鬼貫

又も又花にちられてうつら〳〵　其角

惜めども寝たら起たら春である　去来

炭取にいやしからざる木葉哉　野坡

應〳〵と云へど叩くや雪の門　凡兆

秋風や白木の弓に弦張らん　嵐雪

鳶の輪のくづれて入るや山櫻　惟然

小夜時雨隣りの臼はひきやみぬ　蕪村

或僧のきらひし花の都哉　蕪村

更け行くや水田の上の天の川　蕪村

井戸堀の浮世に出たる暑さ哉　蕪村

二た本の梅に遅速を愛す哉　蕪村

春の海日ねもすのたり〳〵哉　蕪村

學問は尻からぬけるほたる哉　蕪村

我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす　蕪村

簀戸のねるや一人の親の側　蕪村

ねよと云ふ寝覚の夫や小夜砧　蕪村

人心幾度河豚を洗ひけん　蕪村

油斷して花になりたる櫻哉　蕪村

鯛の鳴けば颪の花盛ちぬ　蕪村

野　凡　惟　嵐　蕪

坡　兆　然　雪　村

太　禮　良　臺　嘯

佐藤紅緑先生愛誦俳句

人戀し火ともし頃を櫻ちる
露時雨しぐれんとすれば日の赤き
絲遊の亂れ〳〵て靜かなり
冬籠史記讀む程は米もあり
牛蠅は牛をたのみつ秋の風
見ても〳〵舟はかどらず雲の峰
浴して且うれしさよ簞
藥喰覺束なさに人誘ふ
鮮さき魚拾ひけり雪の中
八月や青い空から二〳〵日
思ふ事なき夜春雨ふりにけり
やれ打つな蠅が手をする足をする
我病んで櫻に思ふ事多し

白閑移百召凡吟冥一子
雄更竹明波菫江々茶規

佐藤紅緑先生愛誦俳句

四夫にして神と祭られ雲の峰
長き夜を月取る猿の思案哉
同し事を廻燈籠の廻りけり
送紅緑
冬になつて柿なほ澁し此心
朝顏や色々に咲いて皆凋む
河豚生きて腹の中にてあれる哉

山縣五十雄先生愛誦西詩

I.

TO-DAY.

So here hath been dawning
Another blue[2] Day:
Think wilt thou let it
Slip useless away.

Out of Eternity
This new Day is born;
Into Eternity,
At night, will return.

Behold it aforetime
No eye ever did:
So soon it forever
From all eyes is hid.

Here hath been dawning
Another[14] blue Day:
Think wilt thou let it
Slip useless away.

Thomas Carlyle.

註釋

此詩の作者 Thomas Carlyle (1795-1881) は歴史家及び文學者として最も有名なる人なり，蘇國 Dumfriesshire の一村に生れ，父は石工後小農となれり．十四歳の時 Edinburgh 大學に入り，後學校教授となりしが，1818 年の頃より文學社會に身を投じ，奇抜勁健の文を以て健全純潔なる思想を鼓吹し，十九世紀に於ける英國最大文學家と仰がるゝに至りたり．蓋し英國人に好き感化を與へたる近世此人の如く大なるはあらずして，彼は 1834 年より Chelsea に居を卜し，爾來殆ど五十年間其處に永住せしかば，Chelsea の賢言者 (Seer) と呼ばれて世人の尊敬を受けたり．彼が又精神的火山 (Spiritual volcano) なる名を得たるを見ても，彼れの如何なる文學者なりしかを想見するを得べし．彼れが多くの著作の中最大のものは "Erench Revolution" (佛國革命史) にして，これに次ぐは "The History of Friedrich II of Prussia" (普國レヂデリック大王傳) "Letters and Speeches of Oliver Cromwell" (クロムウェルの書簡及び演説) 等なり．これ等はいづれも史的著作なるが，哲學的著作には "Sartor Resartus," "Past and Present" 等あり，然れども其最も有名にして廣く讀まるゝは "Heroes and Hero Worship" (英雄崇拜論) と題する講演ならん．

2. blue Day 青き日，晴れ渡りて青空を現はせる日

14. Another 又一つのといふ意

今日

トマス・カーライル

こゝに青き日又明けぬ,
あだに過ごすと思ふ勿れ.

新なる今日の日は,
永遠のうちより生れて,
夜に至れば,
永遠のうちに歸らむ.

いまだ前に之を見たるなく,
忽ち永久に隱れ去りて,
再び之を見るはなし.

こゝに青き日又明けぬ,
あだに過ごすと思ふ勿れ.

II.

A PSALM OF LIFE.

Tell me not, in mournful numbers,(1)
"Life is but(2) an empty dream!"
For the soul is dead that slumbers,
And things are not what they seem.(3)

Life is real! Life is earnest!
And the grave is not its goal;
"Dust thou art, to dust returnest,"(4)
Was not spoken of the soul.

Not enjoyment, and not sorrow,
Is our destined(10) end or way;
But to act, that(11) each to-morrow
Finds us farther than to-day.

Art is long, and Time is fleeting,(13)
And our hearts, though stout and brave,
Still, like muffled drums,(15) are beating
Funeral marches to the grave.

In the world's broad field of battle,
In the bivouac(18) of Life,
Be not like dumb, driven cattle!
Be a hero in the strife.

Trust no future, howe'er pleasant!
Let the dead past bury its dead!(22)

れば肉體にして肉體に非ずとの意

7. "Dust thou art, to dust returnest" 聖書に在る句を引用し來れるもの，因にいふ前節の "Life is but an empty dream" なる句は人のよくいふ句なるを以て"" を附したるなり

10. destined 運の定まりたる

11. that 爲めに

13. Art is long, and Time is fleeting 學藝に達するには長き歳月を要するに反して人生は短しとの意

15. muffled drums 包める太鼓，柩を墓場に送る時の奏樂に用ゆる太鼓は黒き布にて包むが例なり，人の心臟は猶ほ此太鼓の如く其打つ毎に人の生命は縮まり行くものにて，恰も葬送行進 (Funeral Marches). の曲を打つに等し

18. bivouac 露營，兵語にて天幕もなく一夜を送る陣をいふ恰も人生は露營の如し

22. Let the dead past bury its dead! 過ぎ去りたる事は其まゝ捨ておけとの意

28. leave behind us footprints on the sands of time 時の砂上に足蹟を遺す，即ち史上に遺る光榮ある事業を爲す

30. main 大洋

32. take heart again 再び奮起する

33. be up and doing 起ちて爲す所あれ

34. a heart for any fate 如何なる運命に對するも屈せざる心

人生の歌

ロングフエロー

眠れる精神は死せるにて，
形は生けるにあらざれば，

Act,—act in the living present!
Heart within, and God o'erhead![29]

Lives of great men all remind us
We can make our lives sublime,
And, departing, leave behind us
Footprints on the sands of time.[28]

Footprints, that perhaps another,
Sailing o'er life's solemn main,[30]
A forlorn and shipwrecked brother,
Seeing, shall take heart again.[32]

Let us, then, be up and doing,[33]
with a heart for any fate;[34]
Still achieving, still pursuing,
Learn to labour and to wait.

Henry Wadsworth Longfellow.

此詩の作者 Longfellow (1807-1882) は米國第一流の詩人にして，Maine 州 Portland に生れ，歐洲に遊學したる後 Harvard 大學の近世語學の教授となりたり．"Hyperion" と題する散文の物語を著はしたる他に，其作にかゝる長短の詩篇頗る多し，就中有名なるは "Evangeline", "The Golden Legend," "Hiawatha," "Miles Standish" 等なり

1. numbers 詩歌，詩歌は一句の syllable の數一定し居れるを以て number (數) なる語は詩歌の意を有す

2. but only の意

4. things are not what they seem 物は見えるやうでない，こゝに things は肉體をいひ，肉體はあれど生命なけ

人生の上路

「人生は空しき夢なり」と，
悲しき歌もていふ勿れ．

人生は實(まこと)なり，まじめなり，
行きつく所は墓ならず，
「塵の身なれば塵に歸す」，
そは精神をいふならず．

我等の目的はた途は，
喜び悲みと定まれるに非ず，
各々勤め働きて，
明日(あす)は今日より進むに在り．

學藝は長く歲月は短し，
よし強くとも我等の心臟(こゝろ)は，
葬儀のつゝめる太皷の如く，
墓場をさして進行の曲を打つ．

世界の廣き戰場に出でゝ，
人生の陣所にありて，
默々追はるゝ牛馬となる勿れ，
進んで戰ふ勇者となれ．

樂しとて未來を信ずる勿れ，
逝けるは逝ける過去に任さん．

百合野

働け！唯生ける現在に働け，
中に清き心もて，上に神を戴きて．

偉人の傳記は訓(おし)ふ，
我等の生涯も高くなし，
さて死ぬ折りには時なる砂に，
足蹟(あしあと)を留めて行き得ることを．

其足蹟(あしあと)や人生の，
大海原に乘り出して，
破船失望せる人が，
見て氣を取直すことあらん．

されば我等は奮起して，
如何なる運にも屈せぬ心もて，
絕えず爲し遂げ．絕えず努(つと)めて，
働きて且つ待つことを學ばん．

III.

THE VILLAGE BLACKSMITH.

Under a spreading[1] chestnut tree
The village smithy[2] stands;
The smith, a mighty[3] man is he,
With large and sinewy[4] hands;
And the muscles of his brawny arms,
Are strong as iron bands.

His hair is crisp,[7] and black, and long,
His face is like the tan;[8]
His brow is wet with honest[9] sweat,
He earns whate'er he can,[10]
And looks the whole world in the face,[11]
For he owes not any man.[12]

Week in, week out,[13] from morn till night,
You can hear his bellows blow;
You can hear him swing his heavy sledge,
With measured[16] beat and slow,
Like a sexton[17] ringing the village bell,
When the evening sun is low.

And children coming home from school
Look in at the open door:
They love to see the flaming forge,
And hear the bellows roar,
And catch[23] the burning sparks that fly
Like chaff[24] from a thrashing floor.

He goes on Sunday to the church,
And sits among his boys;
He hears the parson[27] pray and preach,
He hears his daughter's voice
Singing in the village choir,[29]
And makes his heart rejoice.

It sounds to him like her mother's voice,
Singing in Paradise!
He needs must[33] think of her once more,
How in the grave she lies;
And with his hard, rough hand he wipes
A tear out of his eyes.

Toiling—rejoicing—sorrowing,
Onward through life he goes;
Each morning sees some task begun,[39]
Each evening sees it close;
Something attempted, something done,[41]
Has earned a night's repose.[42]

Thanks, thanks to thee, my worthy[45] friend,
For the lesson thou hast taught!
Thus at the flaming forge of life
Our fortunes must be wrought;
Thus on its sounding anvil shaped
Each burning[48] deed and thought!

Henry Wadsworth Longfellow.

語一の上向

1. spreading 枝の四方の廣がれる
2. smithy, 鍛冶場, smith は鍛工.
3. a mighty man えらい男
4. sinewy hands 太い筋のある強壯なる手
7. crisp 縮(もつ)れたる, 短く縮れたる
8. tan 樺の皮のやうに茶褐色を帶びて居る
9. honest sweat 正直一心に働いて出る汗
10. He earns whate'er he can 彼の腕で儲け得らるだけを儲ける(其他に貪らぬといふ意言外にあり)
11. looks the world in the face 全世界を眞向に見る, 即ち獨立獨行誰にも頭を下げないといふ意
12. he owes not any man 彼は何人にも借金をせず恩惠を受けぬ
13. Week in, week out 一週又一週
16. measured beat and slow 彼が金槌を打ち下ろす數は一定して(measured)且つ靜かに落付いて居る
17. sexton 寺の小使, 鐘つき男
23. catch 捕へる
24. chaff from a thrashing floor chaff は稻の實等を打つ時に飛散る粃殼(もみがら), thrashing floor は打禾場(いれうちば)
27. the parson 牧師
29. the village choir 耶蘇教の會堂に於ては其地の美聲の子女を以て唱歌隊を編成し, 讃美歌を唱はしむ, 此鍛工の娘も其村の唱歌隊の一人なるなり
33. needs must think 必ず憶ひ出す.
39. Each morhing sees some task begun 毎朝何か仕事を始めて
40. Each evening sees it close 毎夕それを仕上げてしまふ
41. Something attempted, something done 何か企て、何か仕

野百合篇

了りて
42. Has earned a night's repose 安心して其夜眠に就く
43. my worthy friend 我尊敬すべき友. 人を形容する worthy なる語は大抵身分のあまり高からぬ然し尊敬すべき人の上に用ふるが例なり
48. burning 燃ゆるが如き, 熾然たる

村鍛冶

ロングフエロー原作
湖處子譯

椙をひらく栗が根に,
見ゆるは里の鍛冶屋なり,
鍛冶の男はたけたかく,
骨たくましく手も肥えて,
つよき腕はくろがねの,
索も綯ふべく見えにけり.

髮はかしらに結ぼほれ,
面はあかくなりにけり,
とるいとなみの間をなみ,
ひたひの汗のひるまなし,
さはれ世に負ふ所なみ,
ひろきはかれの肩身なり.

日日のあけくれ一週,

たゝらの風の絶間なし、
鐵砧(かなしき)たゝく槌(つち)とも、
自づからなる調(しらべ)にて、
夕日うずづく山寺の、
鐘のこゑにも似たらけり。

學びの庭をちる子等の、
むれて窓べにおちかへり、
もゆる圍爐裏(ゐろり)やおもしろき、
たゝらの音にこゝろゆき、
瞬く間ごと花とちる、
火花ひろひて遊ぶなり。

安息日(やすみび)來ればわが子等を、
つれてみ寺にまうでては、
ひじりの祈(いのり)神のみち、
わけても鄙(こ)のしらべにて、
歌ふわく娘のあはれなる、
歌をきくなりうれしげに。

天津國にて亡き母の、
歌ふ聲聞くこゝちして、
わく娘が歌ふ度ごとに、
むかしのことを思ひいで、
鐵(かね)もひしがむ其手もて、

涙ふくなり人しれず。

喜び悲み、營みの、
めぐる車の世を世にて、
事なし初(もの)ぬ朝な朝な、
事なしはてぬ夕な夕な、
思ひたちまち遂げぬれば、
夜々のやすみものどかなり。

其鍛冶男朝な夕な、
めてたき敎を敎ふなり、
わが運命も世の中に、
圍爐裏にとけて、鐵しきに、
きたはれてこそ、世をてらす、
業(わざ)と言葉になりもすれ。

願.

A WISH.

Mine[1] be a cot beside the hill;
A bee-hive's hum shall soothe my ear;
A willowy brook, that turns a mill,
With many a fall shall linger near.

The swallow, oft, beneath my thatch,[5]
Shall twitter[6] near her clay-built nest;
Oft shall the pilgrim[7] lift the latch,
And share my meal, a welcome guest.[8]

Around my ivy'd porch shall spring
Each fragrant flower that drinks the dew;
And Lucy,[11] at her wheel,[11] shall sing,
In russet gown and apron blue.

The village church, among the trees,
Where first our marriage vows were given,
With merry peals shall swell the breeze,
And point[16] with taper spire to heaven.

Samuel Rogers.

此詩の作者 Samuel Rogers (1763-1855) は英國第二流の詩人にして，倫敦に生れ，父は銀行家なり．彼れ亦銀行家としての教育を受け，一生銀行業に從事したるが，文學を嗜好し，業務の餘暇に "The Pleasures of Memory," "Human Life," "Italm" 等の諸詩篇を出したり．彼は又話し上手にて，多くの佳話を語りたるが，これは彼の "Table

Talk" の中に收められあり，錙銖の利を爭ふ銀行家として，此詩に現はれたるが如き清き脫俗の望を抱ける彼は，思ふに必ず善良しき人格を有せしならん

1. Mine be a cot 小き家が私の物であれ，即ち一の小草庵を我物としたい
5. thatch 藁にて葺ける屋根
6. twitter チユーチユーと囀る
7. Pilgrim 普通の意味は巡禮者，詩歌にはよく旅人といふ意味にて用ゆ，こゝには旅人
11. Lucy 女の名，即ち妻の名なり，次節に婚禮の事を述べてour といへるを以て見れば妻の名なること明なり
11. wheel 車，こゝには紡車をいふ
16. point with taper spire to heaven 尖れる塔が天國を指して，死すれば天國に行くといふ希望を與へる

望み

サミユエル・ロヂヤース

小山がくれの小庵(こいほり)を，
我物として蜜蜂の，
うなりに耳を慰めて，
柳の木かげにちろゝと，
小瀧となりて流るなる，
小川にかゝれ水車．

藁もて葺ける我軒に，
しばゝゝ鳴けよ燕鳥(つばくろめ)，

土もて作れる巣に近く，
鍵をはづして旅の人，
しばゝゝ訪(おとな)へ，うれしき賓客(まらうど)，
我と夕食(ゆふげ)を共にせん．

蔓(つた)まつはれる戸のほとり，
露にしげりて香よき，
くさゝゝの花咲き出でゝ，
妻は廻はすや絲車，
茶色の上衣水青の，
前かけつけて歌ひつゝ．

二人が二生の誓ひせし，
森の中なる村の寺，
持て來よ其處(そこ)より風に乘せ，
いともたのしき音樂を，
尖れる塔はいや高く，
天國の方を指示(しめ)して．

V

TO A WATERFOWL.

Whither midst falling dew,
While glow the heavens with the last steps of day[11]
Far, through their rosy depth, dost thou pursue
Thy solitary way?

Vainly the fowler's[12] eye
Might mark thy distant flight to do thee wrong,[13]
As, darkly painted on the crimson sky,
Thy figure floats along.

Seek'st thou the plashy[14] brink
Of weedy lake; or marge of river wide,
Of where the rocking billows rise and sink
On the chafed ocean side?

There is a Power,[15] whose care
Teaches thy way along that pathless coast,—
The desert and illimitable air,—
Lone wandering, but not lost.[16]

All day thy wings have fanned
At that far height, the cold thin atmosphere;
Yet stoop not, weary, to the welcome land,
Though the dark night is near.

And soon that toil shall end,
Soon shalt thou find a summer home, and rest,
And scream among thy fellows;[23] reeds shall bend
Soon o'er thy sheltered nest.

Thou'rt gone, the abyss of heaven
Hath swallowed up thy form; yet on my heart
Deeply hath sunk the lesson thou hast given,
And shall not soon depart.
He[29] who, from zone to zone,[29]
Guides through the boundless sky thy certain flight,[31]
In the long way[32] that I must tread alone,
Will lead my steps aright

William Cullen Bryant.

此詩の作者 william Cullen Bryant(1794-1878) は米國の自然詩人なり. 彼の詩は主として米國の自然を唱へるもの多く, これにより彼は米國の Wordsworth, と稱せらる, 彼は米國 Massachusetts 州に生れ williams College に於て教育を受け法律家となりしが, 後其業を廢して, 專ら文學及び新聞に從事したり. 彼は 1825 年 New York Evening Post の記者となり, 以來五十年間これを編輯したり, 一生の間作る所の詩多くは短篇にして深く世人に愛せらる,

此詩は水鳥の飛ぶを見て inspiration を得神の存在を信ずるの意を歌ひたるものにして, 蓋し此詩人の最大傑作の一なり,

3, the last steps of day 夕日, 西洋の詩歌に於て屢々日を人に譬へ, 天路を歩み行く者となし, 夜に至れば一

日の旅程を了へて休みに就くとなす, 其 last steps は即ち夕暮の頃なり.

5. fowler 銃獵者
6. to do thee wrong 汝に害を加へんとて
9. plashy 水溜のある
13. a Power 神の力をいふ
16. Lone wandering, but not lost. 唯獨り漂泊するなれど途を失ふことなし
23. thy fellows 汝の仲間
29. He こゝには神をさす
29. from zone to zone は熱溫寒の三帶の帶なり, 即ち遠地より遠地へといふ意
31. thy certain flight 汝の確なる(途を誤ることなき)飛び
32. In the long way 遠き路, こゝには死出の旅路をいふ

水鳥に寄す

ブライアント

夕日に空はかゞやきて,
露しげくおつる時しも,
薔薇花の色の濃き中を,
汝たゞひとり, 何處をさしてか,
遙かにも飛ぶ.

紅の空に黑く映りて,
汝の形の浮び去る折り,
汝を害めんとて獵夫が,
竊に飛び行く汝の影を,

見送るとても徒なれや，

汝が行衛は，葦しげる，
湖水の邊こゝかしこ，
水のたまれる所なるか，
ひろき河流の岸なるか
はた又怒れる太洋の，
大浪起ち伏す濱なるか．

道なき濱邊，荒れたる原，
際限もなき空中を，
獨りさまよふことなれば，
途失はず迷はぬやう，
汝を導く力あり．

日ねもす汝の兩翼は，
遙にたかき大空の，
さむくもうすき空氣を，
扇ぎ扇ぎて疲れたり，
されど下り立つこと勿れ，
汝を喜び迎ふる陸地に，
暗き夜は近づきたれど．

さて幾程もなく汝が勞は，
了りを告げて，夏の家と，

休みとを得て，汝は汝が，
友のうちに叫ぶならん，
幾程もなく葦は汝が，
隱れたる巢の下に折れ伏すならん．

汝は去りぬ，大空の深みは，
汝の形を呑み了へぬ，
さはさりながら我胸深く，
汝が與へし敎訓は殘りて，
早く忘るゝなけん．

限りなき大空に，
遠き地より遠き地へ，
誤まらで飛び行く汝に，
道しるべし給ふ神，
我唯獨りたどるべき，
長き旅路に我歩み，
正しく導き給ふらん．

VI.

JOHN ANDERSON, MY JO.

John Anderson,[1] my jo,[1] John
When we were first acquent,[2]
Your locks were like the raven,
Your bonnie[4] brow was brent;[4]
But now your brow is bald, John,
Your locks are like the snow;
But blessings on your frosty pow,[7]
John Anderson, my jo.

John Anderson, my jo, John,
We clamb[10] the hill thegither;[10]
And mony[11] a canty[11] day, John,
we've had wi[12] ane anither;
Now we maun[13] totter down, John,
But hand in hand we'll go;
And sleep thegither at the foot,[15]
John Anderson, my jo.

Robert Burns.

此詩の作者 Robert Burns (1759-1796) は蘇國第一の抒情詩人にして貧賤なる農家の子なりされど其父なる人は力の及ぶ限り,これに教育を受けしめたり.彼は幼き時より驚くべき詩才を現はし,十六歳の頃より蘇國の土語を以て種々の詩歌を作り,多少其四邊の人に知られしが,故國に於ては生計を營むこと困難なるを以て,Jamaica に移住せんと欲し,其旅費を作る爲め其詩集

を出版したり,然るに世人はこれによりて隱れたる天才を發見し,好評噴々たりしかば,Burns は又外國に移住するの必要なく,Edinburgh 府に出でゝ貴人名士等と交際し,一貧農夫の子は忽ちにして名を天下に知らるゝに至れり.

此詩は年老いたる妻が其夫に語るの旨趣を以て夫婦親睦の幸福を頌ひたるもの,其想の純朴にして虛飾なきを以て優れり,用語は蘇國の土語なり.

1. John Anderson. 夫の名なり
1. my jo. my dear, 我親愛なる人
2. acquent. acquainted, 知り合ひとなる
4. bonnie. cheerful, 樂しき
4. brent. sun-burnt, 日にやけて浅黑く
7. pow. head, 頭
10. clamb. climbed, 上りし
10. thegither together, 共に
11. mony a canty day. many a cheerful day 多くの樂しき日
12. wi ane anither. with one another 互に
13. maun. must
15. at the foot 麓て(其小山の)

いとしき人よ、我夫よ

バーンス

いとしき人よ，我夫(つま)よ，
初めて君と知りし時，
髪は烏の如くにて，
額(ひたひ)はやけて黑かりし.

されど今はし額禿げ，
髪は雪にも似たりけり，
されど幸あれ，霜の如き，
君の頭に幸あれよ，
いとしき人よ，我夫よ．

いとしき人よ，我夫よ，
共に登りし此小山，
樂しかりける日を多く，
互に見しが今はしも，
下りねばならず，よろぼひて，
さはさりながら我夫よ，
手に手をとりて共に行き，
寢に共に眠らなん，
いとしき人よ，我夫よ．

野口米次郎先生愛誦西詩

我に私が米國過去二十五年間に於て最も大なりと認むる二篇の詩を送り申候間御用ひ被下度願上候

一はマーカム氏の作にて佛國大畫伯ミレーの作『鍬持てる男』ともいふ可き畫に題せるものマーカムの詩の顯はるゝや天下は驚きて賞嘆の目を以て見突然米國社會に社會主義の起れるを見たる次第に御座候大に勞働者に對して詩人的同情を寄せたるもの

二は余の師ミラーの作にて數年前當教雜誌アセニアンに於て其筆力の强固なる點此の詩を以て米國古今を問はず第一に推すと批評せるものに御座候　匆々

十一月二十七日　野口

茅原君

THE MAN WITH THE HOE

by

EDWIN MARKHAM.

"God made man in His own image, in the image of God made He him."—Genesis.

Bowed by the weight of centuries he leans
Upon his hoe and gazes on the ground,
The emptiness of ages in his face,
And on his back the burden of the world.
Who made him dead to rapture and despair,

A thing that grieves not and that never hopes,
Stolid and stunned, a brother to the ox?
Who loosened and let down his brutal jaw?
Whose was the hand that slanted back this brow?
Whose breath blew out the light within this brain?

Is this the Thing the Lord God made and gave
To have dominion over sea and land;
To trace the stars and search the heavens for power;
To feel the passion of Eternity?
Is this the Dream He dreamed who shaped the suns
And pillared the blue firmament with light?
Down all the stretch of Hell to its last gulf
There is no shape more terrible than this——
More tongued with censure of the world's
blind greed——
More filled with signs and potents for the soul——.
More fraught with menace to the universe.

What gults between him and the seraphin:
Slave of the wheel of labor, what to him
Are Plato and the swing of Pleiades?
What the long reaches of the peaks of song,
The rift of dawn, the reddening of the rose?
Through this dread shape the suffering ages look;
Time's tragedy is in that aching stoop;
Through this dread shape humanity betrayed,
Plundered, profaned, and disinherited,
Cries protest to the Judges of the World,
A protest that is also prophesy.

O masters, lords, and rulers in all lands,
Is this the handiwork you give to God,
This monstrous thing distorted and soul-quenched?
How will you ever straighten up this shape;
Touch it again with immortality;
Give back the upward looking and the light;
Rebuild in it the music and the dream;
Make right the immemorial infamies,
Perfidious wrongs, immediate woes?
O masters, lords, and rulers in all lands,
How will the Future reckon with the Man?
How answer his brute question in that hour
When whirlwinds of rebellion shake the world?
How will it be with Kingdoms and with Kings——
With those who shaped him to the thing he is——
When this dumb Terror shall reply to God,
After the silence of the centuries?

第一の上陸

COLAMBUS

by

JOAQUIN MILLER.

Behind him lay the gray Azores,
Behind the gates of Hercules;
Before him not the ghost of shores;
Before him only shoreless seas.
The good mate said: "Now must we pray,
For lo! the very stars are gone.
Brave adm'r'l, speak; what shall I say?"
"Why, say: Sail on! sail on! and on!,"

"My men grow mutinous day by day;
My men grow ghastly wan and weak.
The stout mate thought of home; a spray"
of salt wave washed his swarthy cheek.
"What shall I say, brave adm'r'l, say,
If we sight naught but seas at dawn?"
"Why, you shall say, at break of day:
Sail on! sail on! sail on! and on!,"

They sailed and sailed, as winds might blow,
Until at last the blanched mate said:
"Why, now not even God would know
Should I and all my men fall dead.
These very winds forget their way,
For God from there dread sea is gone.

第一の上陸

Now, speak, brave Adm'r'l, speak and say—"
He said: "Sail on! sail on! and on!"

They sailed, they sailed, then spake the mate:
"This mad sea showe his teeth to night.
He curls his lip, he lies in wait,
With lifted teeth, as if to bite!
Brave Adm'r'l, say but one good word:
What shall we do when hope is gone?"
The words leapt like a leaping sword:
"Sail on! sail on! sail on! and on!"

Then, pale and worn, he kept his deck,
And peered through darkness. Ah, that night
of all dark nights! And then a speck—
A light! A light! A light! A light!
It grew, a starlit flag unfurled!
It grew to be Time's burst of dawn.
He gained a world; he gave that world
Its grandest lesson: "On! sail on!"

秋山の記の一節

上田秋成

西光寺とて最廣き曠野に來る行手百丁許と云、西も東も南も、山立並びて、目もはるばるなり、行く〳〵稻葉そよぐ風吹立たず小草花咲き、小松生ひ、莖生隱れの澤水に、鳥どもの浮きて魚を喰ふ、此景色得も言はず面白し、雨いさか打注ぎ來るに、遠山は見る〳〵霧立籠めて、風交に降りみ、ふらずみ人の往還もあらずなりぬ、色々の花ども、露を帶びて麗し、くら、龍膽女郎花の名殘なる、よめが萩の花白菊のよろぼひながら、うしき大和撫子は濃からられど、時過したるが哀なり、躑躅花盛の狂花、百ひ纏くれば、春夏秋の草々を、花一時のながめしたり、尾花ぞ繁く招ぎ合たる折知り顏にてなん、さるとり茨の赤玉纏かしけれど、取らば拇指や傷はん、彼是撰みはやして、手束に餘りぬ、厭かず面白きに、立ぬるし憂も忘れて、雨そゝぎ風吹き立てる秋の野に花のひもとく時は來にけり

明治三十七年十二月九日印刷
明治三十七年十二月十日發行
明治三十八年三月十三日再版
明治三十八年十一月二十二日三版
明治三十二年十月二十日增補改刪四版

（向上一篇收載）

定價金六十錢
郵稅金十錢

著作者　東京市麹町區中六番町八番地　茅原廉太郎
發行者　東京市本郷區元富士町二番地　日高藤兵衛
印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　白土幸力
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三光堂
發行所　東京市本郷區元富士町二番地　日高有隣堂

版權所有　複製許可

大賣捌

警醒社	東京神田區表神保町
東京堂	東京神田區表神保町
上田屋	東京日本橋箔屋町
前川	東京京橋南傳馬町
目黒書店	大阪心齋橋南久太郎町
福音社	大阪南本町堺筋ノ前
杉本書店	大阪備後町四丁目
吉岡平助	神戸市
吉岡支店	京都三條寺町
聖書房	京都二條寺町
若林書店	廣島市
積善館	岡山市岡山町
奥田金昌堂	周防國岩國町
白金日新堂	山口大市町
同支店	熊本市新町二丁目
長崎次郎	鹿兒島市甘山通り仲町
久永新藏	奥後久留米市
鶴竹書店	福岡市
吉見書店	横濱市
弘集堂	同
勉強堂	越後國水原
西村六平	越後長岡
覺張次平	信州長野市大門町
西澤喜太郎	信州松本本町
松榮堂	信州諏訪町
日進堂	仙臺市新傳馬町
紀港堂	陸中一ノ關町
佐藤喜平	陸奥弘前市土手町
今泉道太郎	青森市米町
同支店	秋田市茶町
成見清兵衛	北海道函館相生町
福音社	北海道札幌區南一條四丁目
富貴堂	

明治三十八年三月十日印刷
新刊發行の都度增補訂正す

有隣堂出版書目

東京市本郷區元富士町二番地
日高有隣堂

主意書

理想と光明とを緯となし、趣味と利用とを經となし、宗教、哲學、倫理に、史傳に、戯曲に、小説に又緊急問題に就きての際物に、苟しくも文明の增進と風敎の醇化に大なる功益あるものは其の大家名流たると壯年なる新進文士たるとを問はず、其の玉稿を請ふて出版せんとす是れ本堂の主義也。此の故に本堂は全國各位の愛顧を蒙むり御信用を得んが爲めに本堂出版の新刊書籍に對する新聞雜誌の精評を掲げ御覽に供し來たり候も漸次增加し其數多くして載せ盡す事不能不得止出版書目而已を掲け御覽に供し御注文を仰ぐことゝしたり。請ふ其の意を諒せられんことを。

文學士 大町桂月先生著

新刊 わが筆

定價四拾五錢 郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり敎訓あり才氣あり覇氣あり或は洒脫に或は沈痛に或は眞面目に或は詼謔に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校社會及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

文學博士 姉崎先生序
萬朝報記者 茅原華山著

第四版增補改刪 新社會主義の新福音

安部磯雄氏の駁論 附錄として 及著者の駁々論を

▲向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀め▲此書は個体責任、社會意識、生命一体の三大觀上に社會向上主義を論明したる者なり、▲我國に於て哲學的に社會主義を建設したるは此書を始めとす ▲安部氏の駁論及著者の駁々論は益々新社會主義の本領を發揮せり▲第三編、第四編、第五編共に光彩陸離たり▲近時の一大著述にして情理該博なる者は此書なり 敢て性急の讀書子に勸む

○定價六十錢郵稅十錢

萬朝報記者 茅原華山編纂

新刊 **青年と詩吟** 定價 廿五錢

人生豈詩思詩情なかるべけんや『青年と詩吟』を茅原華山先生が岩溪裳川、森槐南、佐々木信綱、平木白星、佐藤紅綠、山縣五十雄、野口米次郎の諸先生に囑して各、其愛誦さる漢詩、和歌、新体詩、俳句を撰び之を『向上の一路』に載せたるものなり今や新に竹越三叉、志賀矧川、伊藤銀月等諸家の愛誦詩歌を添へ別冊として發行す日夕此卷を把りて諷誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

＊　＊　＊　＊　＊

文學士 大町桂月先生
文學士 中內蝶二先生 合著

四版 **少女と山水** 定價三十五錢 郵稅四錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて山水に在り山水の美や豪宕にして瀟洒少女の美の優婉にして可憐蝶二君の艶麗の文少女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月君の洒脫の文山水の幽趣を寫して雲烟紙表に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を縱にし高尙優雅家庭の讀物ともすべく文章の手本ともすべし腥風血雨に惱める軍國の讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙の美を味ひ給ふべき也

文科大學講師 文學士夏目金之助先生校閱
文學士上田敏先生序文
アーサー、ロイド先生著
チャールス、ラム著 文學士小松武治譯

訂正標註四版 **沙翁物語集** 定價七十錢 郵稅十錢

●上製クロース四百數十頁頗る美本

古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙かざることなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨壁シエークスピーアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戲曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ヂユリエット及冬物語等通じて十編の物語を拔萃し精緻なる飜譯を誠み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附錄を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戲曲の何たるやを窺はんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべきの書也

海老名彈正先生著

再版 **基督教本義** ○上製 六十五錢 郵稅十錢 ○並製 五十五錢 郵稅八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者師教祖の抱懷せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓拔の識勇健の筆を以て上はモーゼより下ルーテル、シユライエルマッヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を說明せられたるもの也幸に愛讀の榮を賜へ

苦學社社輯

苦學の伴侶

定價三十錢
郵稅四錢

生活の道に往き艱める苦學生は此の書を讀め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我國現時の諸大家の成効の秘訣を知らんと欲する者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父の聲咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦學古今誰が苦學せずして成効したる者やある苟も學生にして苦學の心得なき者は忠實なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は學事に志せる總ての青年男女の好伴侶たりと謂ふべし請ふ諸君一本を座右に供せられんことを

海老名彈正先生著　三版

人道

定價十錢
郵稅二錢

先生時局に關し大に感慨するところあり其の豫言者的熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元氣を鼓舞作振せんと欲す乃ち逐次戰時叢書を刊行して宗教家の戰爭觀を告白せんとす是れ其第一卷なり曾に軍國々民の必讀書たるのみならず軍隊慰問用の好冊子なり弊堂毎卷數萬を印刷して廣く世上の需要に應ぜんとす幸に陸續注文を賜へ

加藤直士先生譯

トルストイの

日露戰爭觀

●定價金三十錢●郵稅金四錢

露國巨人トルストイ伯が今回の日露戰爭に關して如何なる意見を抱きつゝあるかは何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫敦タイムスに於て「日露戰爭觀」と題する一大論文を掲げて最も雄渾痛切に其詳細なる意見を發表したり今や邦人鶴首して其内容の全璽を知らんと欲する時に際しト翁紹介者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇を譯述し以て刻下の讀書界の饑渇を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

橫山筆助著

每版

成功したる催眠暗示術

應用自在

●定價三十錢●郵稅四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖、大抵不充分なる譯書、實際に益なき空論的なるもののみ多し、之に反して本書は經驗に經驗を積みたる斯學の老練家が、最新の學理と諸種の方法とを參考して何人にも理解し得るよう又極めて懇切に述べられたるものなり、且つ加ふるに興味ある實驗書を以てす、本書出でゝ我が催眠術界の知識すること必ず大ならん、好學の諸君御愛讀あらんことを。

5/2/40

高橋五郎著

杜伯品藻

トルストイ伯の人物主義を評す

定價卅五錢
郵稅六錢

一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如くす著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人物を四方八面より縱橫論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其端妍得失一目瞭然眞理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評隲する而已ならんや◎讀書子愛讀の案を賜へ

文學士 大町桂月先生書評 木村鷹太郎先生書評
文學士 上田敏先生書評 前田林外先生書評
岩野泡鳴著 青木繁先生書

新體詩集

夕潮

定價三十五錢
郵稅六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏して、うちに無窮の悲觀を備ふる而してその行文自在の調、激して豪健奇抜の想を搆へ、沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、苟も久遠の感慨あるものは來つて、この冥想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、

東京外國語學校教授山口小太郎先生題詩
蘆風秋元喜久雄譯

訂正增補三版

紛紅集

詩粹

定價卅五錢
郵稅四錢

美術的製本

グーフ、シルレル、クルネル等獨逸の七大詩人が金玉の佳什を選び、之を流麗精眞なる筆を以て、飜譯したるもの、一句一字の細と雖ども、悉く原詩の美を顯はしく遺さず。牧むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅紛々として、蓊勃たる香氣、人をして醉はしむるが如きもの集まつて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。

再版

宗教々育觀

定價五十五錢
郵稅八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老名先生は本書に於て教育問題に關する所信を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動するに足るものあるや必せり見よ先生が該博の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂麻を截つの感あらしむ而かも本書の内容は單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に對する先生最近の思想を發表せられたるもの實に凜々たる我邦思想界に於ける一大探海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目して本書の光焰に接せよ

海老名彈正先生著

匿名隱士著

六版 **破天人論** 定價參拾錢 郵稅四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試みたる哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各新聞雜誌の大好評を博せり出版日尚淺きに不拘既に六版を印刷せり以て本書が如何に愛讀せらるゝやを知るべし

齋木仙酔先生譯

トルストイ教訓小說集

●定價金參拾錢●郵稅金四錢

トルストイの宗教論や、大作小說や、夥に是れ雄渾なる革命の聲也、壯なる大煩悶の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる所以蓋し茲にあらん。然れども人は狂瀾怒濤を壯とすると共に、湛然一碧の湖水を樂しまざるべからず。深林巨巖を賞すると共に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也。讀者若しこれを繙かば、髮髯雪の如き老文豪が、如何に諄々として、天使の如き聲を以て、博愛、自然、自由、勞働の大々的福音を鼓吹するかを觀ん。

茅原華山編纂

我と人 定價貳拾錢 郵稅六錢

本書は世間の好評を博したる「向上の一路」生命一脉篇を別冊と爲したるものにして萬朝報の黑岩先生を始め天龍、天山、柏軒、白蛇、松葉、拘狂、「銀月諸氏」より森槐南、姉崎嘲風、成瀨仁藏、菊池幽芳、內藤鳴雪、佐々木信綱、湯本武比古、三宅克己、德永柳洲、齋藤松洲、井口あくり諸家の談論文章を筆錄したるものなり、柳は綠、花は紅、是書を讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

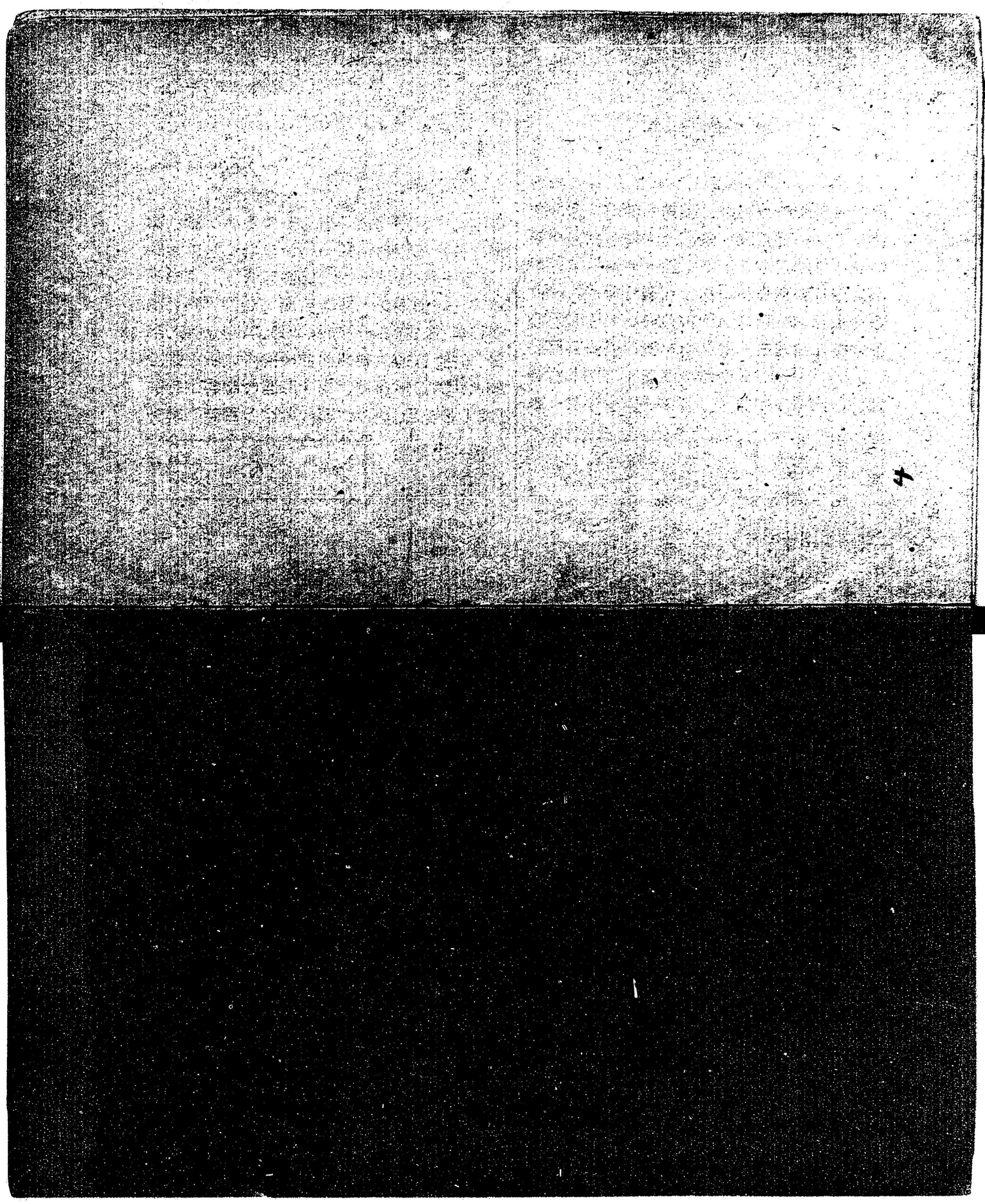
●月刊雜誌（毎月十五日發行）●

基督教講壇 定價一部金拾錢 郵稅一部金五厘

●半年分金五十八錢一ヶ年分金壹圓〇六錢

●切手代用一割增●前金の事

本誌は東京にある各學生及市青年會聯合の編輯にかゝるものにして教派の異同學說の相違に關せず都下と地方とを問はず現代基督教界に立つて福音宣傳の任に當れるあらゆる大家の說教を網羅し眞に能く生命の麵となり靈活の根源たらんことを期するもの也



99

039513-000-8

98-99

向上の一路

華山　茅原廉太郎/著

M38. 3

BDA-0067